大正四年一月一日發行　大正三年十二月廿八日印刷納本
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

女子青年界

第拾貳卷第壹號

要目

女子青年會第十二巻第一號

目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XII   January, 1915   Number 1.

院長診察（月、水、木、金、午前
　　　　　入院診斷後應需

、林、峰間、三副長は目下當院に在勤

東洋内科醫院

電話本局　八八八（病院用）
　　　　　八九八（私宅用）

東京神田區駿河臺鈴木町二
御茶水橋附近

院長　醫學士　高田畊安

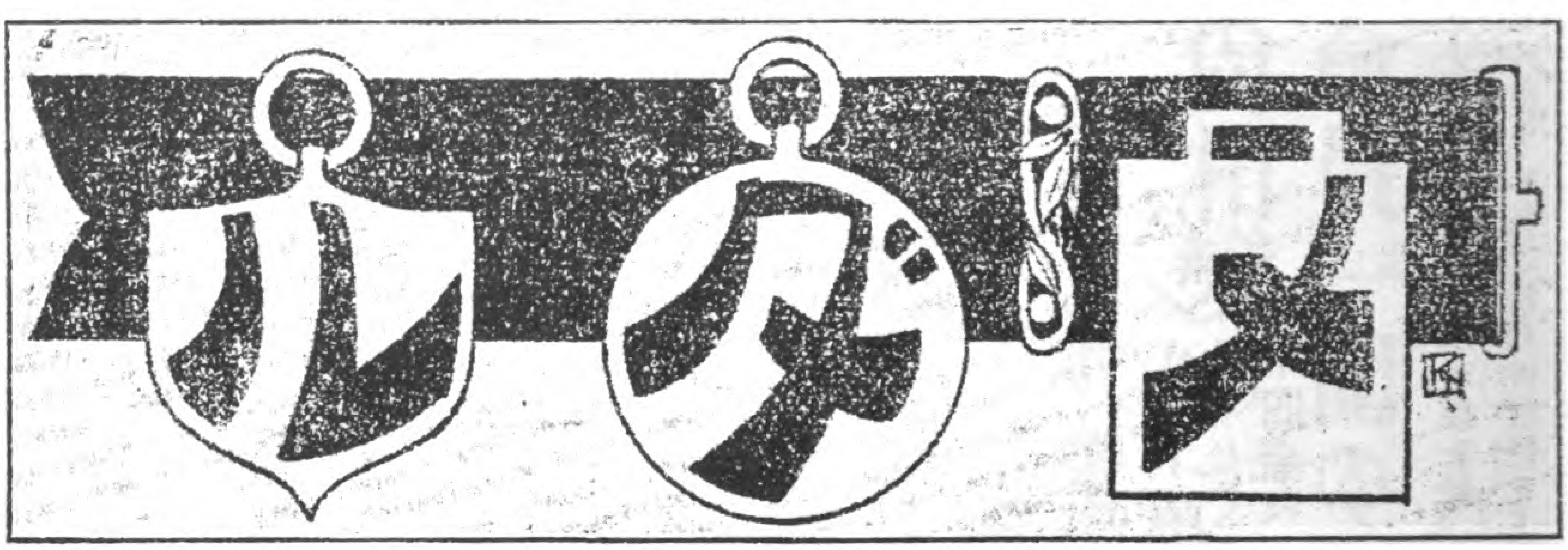
南湖院

神奈川縣高座茅ケ崎町相海濱
從停車場半里

電話　チガサキ　二番

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

院長診察、土曜日午後、入院、診後應需



徽章。賞牌。
金銀木盃。
製造。

東京市麴町區飯田町四丁目

諸官省各學校御用

赤田末吉

電話番町二九二八
振替貯金東京一八一五九

技術精巧。期日正確。
價格低廉。

ピアノ・オルガン



營業種目

一、松本自働ピアノ　六百五拾圓
一、松本ピアノ（自二百貳拾五圓 五百五拾圓迄）
一、松本オルガン（拾八圓以上 貳百貳拾圓迄）

一、獨逸オットピアノ會社一手販賣店
一、獨逸ホーマイアピアノ會社一手販賣店
一、獨逸イバハ、ピアノ會社一手販賣店
一、佛國ウルマン、ピアノ會社一手販賣店
一、獨逸イルムラ、ピアノ會社一手販賣店
ハモニカ（獨乙ホーナー會社特製）（貳十五錢以上 貳圓五十錢迄）
手風琴（同上）（三圓八十錢以上 七圓迄）
ヴアヰオリン（内外各種）（三圓五十錢以上 百五十圓迄）
英、米、獨版樂書、廿錢樂譜

唯一唱歌雜誌 月刊樂譜（一部 五錢五厘　半ケ年 卅錢　一ケ年 五十五錢）

東京銀座四丁目　**松本樂器合資會社**　振替東京一三五〇五
目録進呈

會説

出づると入ると

河井道子

過日教會に於て詩篇百二十一篇の説教を拜聽ました中に「エホバは汝の出ると入るとを守り給はん」と申す一句に牧師先生は特別に力を入れて御說き下さいました。即ち其大意を申せば、ユダヤ人は起居動靜皆神の保護を祈つたのである。家庭を中心として種々樣々の業務があり生存競爭中に奔走して雜多の戰爭をなす是を出ると云ふ。入るとは即ち人の城廓なる家に歸りて家族の者と共に暮らす、或は獨り靜に休息する等の事である。他に出でゝ奮鬪するは容易の事でない。人に出會のには敵中にある樣な感のするは常である。政治界の如き敎育界の如き御殿女中の樣な騷動を演ずるのである。世間は心苦しい處、四方に阱があると見ても差支へない。爰に神の保護を呼ぶ自然の事と思ふ。併し又入ると云ふ事も仲々六ヶ敷もの、小人閑居すれば不善をなす流で外ならば遠慮するが内であり家であるから窮屈にせずともよし、晩酌位はよし、此位のくつろぎはよしと、美しく見ゆる處に又危險がある。かく家の外のみならで退省、歸宅、自分の室、何方も油斷はならぬ。出入共に神の保護を得る必要ありとの御話であ

りました。

抑々此詩篇は旅人の詩篇と稱して友人などの旅行するときによく讀むものであります。又旅行中に讀誦すれば云ひ知れぬ平和と安心とを與へる篇であります。曾て私も外國に渡航致しました時に此經驗を親しく致し日々此に依りて力を得ました。

第一日本を出立すると申は確に大な意味の出ると云ふ事であります。神よ我行程を護り給へと幾度祈りましたか知れません。今度は外國に着くや未知の人の家に宿泊する時、宏大な學校や集會場に招待されし場合、又は折角親しくなりし人々を辭して言語も充分に通ぜぬ國へと旅する間際、淋しさのいや增す旅館の夕方、何日でも旅人の感は去りませんで神よ我出るを守り給へと繰返しました。次に愈々歸途にむかふや又も一色の憂慮が心を襲ひました時に神は出るを祝し給ふた。其故入る＝歸るを亦祝し給ふ事であらう。何卒留守中に起りし出來事が心を亂させず、又平常の職務に就く時に忠實である樣に、外國に居りし者の持來る弊害より免がれん樣、人々に惡き誤解を與へざる樣、自身が外にありて受けし種々樣々の神の惠を空しくせざる樣、責任を完ふし得る樣とかく續々と祈禱や願が、日本に歸る即入ると云ふ際に湧き出ました。何も外國と申さずとも我等誰でも旅行する場合、假令ば休暇で歸省する、又學期が開始するので復校するとかの場合も同樣であります。

或は又入學と卒業との事に宛嵌ても面白い教訓を受けます。在學中に孜々として倦怠を知らざりし人學生中は實に眞面目なる信者としてよく他の爲に己を忘れて活動し、人を導きてキリストに至らしめし有望の青年男女が、卒業後社會に出でし後如何であるか、家庭の主人、主婦となりし時の信仰狀態は如何であるかと正直に調査ますと、得意時代が來たとて墮落し、失意だとて自暴自棄になる者の多いのは實に悲むべきではありませんか。確に私共も神に出るも入るも御守りあれと祈禱をなすべきであります

抑々人生は旅行である事は古より人口に膾炙されて居ります。それで門松は冥途の旅の一里塚めで度もありめで度もなしなどの狂歌に點頭くわけであります。扨て私共は神が此人生の旅行に於て過去一年を御保護なし給ひしがゆゑ必らず又來る年に於ても御惠み下さつて過去に彌增して祝福し給ふを信仰いたします者です。新年は過去を反省して其惠を感謝し將來に踏み出す矢先に眞面目に神の助を祈る一里塚と見て實に御目出度い時機であります。然らば何故にめで度もなしと申す方に尤も同意を表すのでありましよう。是は即ち神なき人現世のみの幸福を思ひ所謂福祿壽が最上のものと思惟する輩には其は御芽出度ことでありません。或は又容色の美のみを心にして居る婦人ならば年取る事は大苦痛でありますかの詩人ブラオニンクが「我と共に老ひ給へ至善至麗は將來にあり」と七十の高齢にて歡呼した樣なことは永生を信じ神を愛し人を愛し救主の惠を經驗した人でなくば申されぬのであります。旅行には勿論晴天順風の日のみではありません。時に怒濤逆捲き風雨進路を遮る如き事は覺悟の上であります。大正四年は私共に何を持ち來たすかは誰も存ぢませんが晴や暴のある丈は知つて居ります。然しかゝる時も神を信仰致すものは晴ゆゑ感謝、暴ゆへに不平を申すべきでなくラスキンと共に「天氣に惡い天氣なし皆良き天氣の變形のみ」と申す心得を養ひ度と存じます。換言すれば神の働きに御目出度事のみで不吉不慶と申す事がないのであります。現今の戰爭の如き誰の眼からみたとて不吉不幸には相違が御座いません。決して神が此戰爭を起されたのでなく惡魔と人間の業でありますが、神が私共人間のかく間違つた量見で大不幸を演じた場合にも樣々の懲戒を下されて是で以て人間を一層高き貴き者に教育して下さる事ゆゑに御互に罪を悔ひ、無責任冷視的の罪をも懺悔して神の御能力にたよらば必らず別天地が此地上に出來るを信じて疑ひません。神のなし給ふ事は皆善であると信仰致し度いものではありませんか。

又、我等自身の罪過失でなくして悲憂の暴浪船を覆へさん勢の時にも二千年前かのガラテヤの湖上に船に在ませし基督を偲び何ぞ怖るゝ處あらんと叫んで主の暴風を鎮靜給ふを待ち度ものであります。
諸姉妹方の今年に於ける行路願くば平穏なれかしですが若しも意外ぬ暴風雨が來襲る時には神は避所磐城なるを思ひ泰然として狼狽せざる事を祈りますさはいへ諸姉は何處に達せんとの旅行でありますか學校の修學何の爲でありますか、家庭の人とならるる、將た社會に立たるる何が目的でありますか。今年の新計畫新希望は何でありますか。人生最後の到着點は何處でありますかと人が質問致したら何と御返事でしようか拜聽たいものであります。
「我は道なり眞なり生命なり、人もし我に依らざれば父の許に行く事能はず、我を信ずる者は死すとも活くべし」と宣ひし救主に導かれつゝ、シオンの山のてりかゞやく城、たのしき都へと又も一ケ年勇ましき旅行を續けたいものであります。

明日もまた朝とく起きて勤めばや
窓にうれしき有明の月　（古歌）

日々讀み考へ且つ祈れ

1 我生涯は神を悦ばしむるや
2 我は基督者の生活を樂むや
3 我心に於て誰かを憎惡し居るや
4 我は日々聖書學び居るや
5 我は密なる祈に幾何の時を費すや
6 我は基督に人を導きしや
7 我は祈の應答を神より直接に得し事ありや
8 我は誰かの救のために祈り居るや
9 我は基督のために捧げ得ざるものありや
10 未信者に我生涯は如何に映ずるや
11 我は主の金に正直なりや
12 人のなすを寛宥せざる業を己自身なし居るや
13 我責任を全し居るや
14 我最大の過失は何ぞや
15 我あるがため世は幸されしや將た害されしや
16 我は基督の來り給ふを早めんと勉め居るや
17 基督我位置に在まさば行ひ給ふ如く我は行ひ居るや

我汝等に告げん（求よ然ば與へられ尋よ然ばあひ
　　　　　　　　門を叩よ然ば開かるゝ事を得ん）

再生の恵

山室軍平

昔の事で秋の頃ででもあつたらう四人の商人が集まつて何か氣散じをし樣ではないかと相談の結果一つ風流氣を出して鹿の聲をきゝに行かうと云ふ事に衆議一決し各自に重箱に何か御馳走を入れて、とある山寺に行き一室を借りて重箱を開いた。田舍の事であるから遠慮なく他人の重箱にも箸をつけたりしながら呑氣に四方山の話をして居た。處が其の内の一人の何となく晴れぬ顏付きを見つけた他の一人が其の理由を問ふた。其人の答へて云ふに「鹿の鳴聲をきく等と云ふと如何にも呑氣さうであるが自分の子供の事を考へると心配でたまらない息子が未だ廿才も越さないのに放蕩で金を湯水の樣に使ふから行先きが案じられる」と之を聞いて居た一人が、「自分の子ならばまだ／＼いゝが私の家などでは役にも立たない時から育てた他人の子が大きくなれば帳面をごまかして金を使ふから心配でたまらない」と云へば三人目の人のまた、「息子にせよ他人の子にせよ金を使ふと云つても使ふ金があるからいゝのですよ、私の家では使ふ金が入つて來ないので大變心配して居ます。取り引き先が皆金を拂はずに逐電すると云ふ有樣で全く入つて來ないから實に心配苦勞をして居ます」と語をついだ。四人目も又これにおとらず「金を使ふとか金が入つて來ないのは未だ辛抱が出來ますが私の家ぢや母と妻の折合がわるく喧嘩の絶え間なしには實に心配でなりません、母が少し無理だと思ふてその事を云へば、若い者同志がぐるになつてこの年老りをいびり殺す積りかと云ひますし、又妻が惡い時に、惡いぢやないかと云へば他家から來て

居る者と思つて母子でいぢめると云ふので如何したらいゝか、ほと〳〵困る、此事を考へるとうかして居られない」と同じく泣き事を述べた。かう云つて見れば皆相當の心配事を持て居るが、處でもう鹿は鳴きさうなものだと障子を開けると一匹の鹿が茫然立つて居たので、「冗談ぢやないお前の泣きごゑをきゝにばかりやつて來たのに」と云つた處が鹿が口を開き、「鳴かうと思つてきましたがあなた方が泣き事を言つておいでになるのでそれをきいて居りました」と云つたさうである。これはほんの作り話ではあるがこれには面白い眞理が包まつて居る。

人は初對面の人には自分の心配事などを話さないが二度三度と會ふ内には自分の有して居る心配事を語るものである。この心配事は十人十色で一筋繩でとく事の出來ないものである。例へば縁談の事、死に別れ生き別れ等の心配、又は母の事を子が心配し子の事を親が心配すると云ふ有樣でこの心配苦勞は人が生れると直に負ふて居るものである。この心配苦勞は體のために最も惡くこれがため往々夭死するのである。支那の本には心配すれば背に腫物を生じ死すと記してあるが今日では神經衰弱とかヒステリーを惹きおこすのである。兎に角自分においきれぬ心配事を有する時には流行病よりも何よりも以上に壽命を縮めるのである。さればこの心配をとり安心滿足を得るには如何にすればよいか。ある人は酒とか活動寫眞とかで心配事を忘れ樣とするが駄目である。又奇麗な衣をきて滿足を得やうとしても外に出ればなほ幾十倍の立派な着物をきた人が居るから駄目になつてしまふ。虚榮にあこがれて世を渡る人は酒を飲んでは詩を作つた李太白の樣なものである。過日一人の人が救世軍に救はれたが其の人に救はれる前に汝の行に對し如何な感じをもつて居たか面白かつたかと問ふた所が、「面白くは少しもありませんでした。まあ云つて見れば生温るい風呂に入つて居る樣でしたこれではいけないから出樣と思つても精がないのです」と答へたがこの人の以外にもこれと

同じ様な感じをもつて居る人が有るに違ひないと思ひます。昔英國に一人の貴婦人が居つたが金があるのでこの婦人の道樂は芝居であつた。そして彼の女は芝居は最上の完全した快樂を與へるものである。即ち見て面白かつたと云ふ過去と今見て居て面白いと云ふ現在と又見ると云ふ未來の樂しみの三つを完全に備へて居ると盛んに芝居の功能を唱へて皆の人を煙に巻いておりましたが、或日熱心な基督信者が來た所又例の如くに彼女は其効能をとき立てた。これを聞いた信者の人はもう一つ芝居には欠けたものがあります。人が死ぬる間際に芝居で滿足がえられましようかと反問したので婦人も流石に氣がつきそれから信仰に志したと云ふ事であります。歡樂終りて哀情はげし驕る者は久しからずと云ふた樣な風である。

第二に場所をかへて滿足を得樣とする人が今日でも尚ほ間々ある。三月程前夜遲く築地の精養軒から電話がかゝつたので行つて見ると和蘭の男爵で金も十分に有り又詩も作るが安心が得られぬので、はる〴〵日本まで安心をたづねて來たが得られず北海道のトラピストと云つて世を捨てゝ山にすむ陰者の一群に身を投じたが矢張り安心はえられない。丁度「世を捨てゝ山に入れ共、山にてもなほ憂き時は何處行くらむ」と云つた樣な風でこの男爵はほう〴〵の體で東京に逃げ歸り、この上は救世軍でなければ駄目で、もし是でもいけなければ死ぬばかりとの事であつた。そこで翌日英國の士官をおくりその士官の家に數日引取り世話をしてやつた樣な次第であつた。今もなほ思ひあまつて日光の瀧に入る人が澤山ある又神戸の三宮のステーションから少しはなれた場所に一軒の牛乳屋があるがそこの近くが人家をはなれた處で鐵道往生には屈强の場所がある此處で餘り多數の人が死ぬのでその牛乳屋は救世軍の信者であつた處から私にこれを止めさせる方法を相談した。それで私がよくわかる樣に大きな字で「一寸まて」とかき後は小さな字で「思ひつまつて死ぬ人はこの牛

乳屋か神戸の救世軍に來い」と記した立ふだを立てたらいゝだろうと云つた。その樣にした處が其の後死ぬ人はなくなり神戸の救世軍に相談にきて職を得たものも澤山ありました今もそこを通れば見へるでせう。心配があるからとてこれを酒や活動寫眞などで止める事は出來ない又山に入つた處で駄目でこの世を捨てもなほ安心にえられない。

されば如何にすればいゝかキリストの御言葉に、「我が安心を汝に與ふ」と吾れにこい來さへすればこの世が與へる安心と異つた安心を與へるとあります。即ち體のそこの安心や場所を代へての安心とは違ひ胸の奥から來る心のやすきによりて與る所の安心である。

或る處に一人の孝行息子が居つたが父を失つたので毎日〳〵父よ〳〵となつかしがつて居た。ある時町に出た處が店に丸い物があつて其の內から自分のしたつて居る父親の姿が現はれたので大喜びで其をもとめ家にかへり二階の長持の中に入れて毎日これをながめては慰さめて居つた。夫の樣子が落付ない樣子を不審に思つた妻は夫の不在中二階に上つて見つけるが何も注意を引くものがないそれで長持をあけると見なれない丸いものがあるので取り上げて見ると中から若い婦人の姿があらはれた。妻は大變おこつて夫が歸宅すると其處に喧嘩がはじまつた。これをきゝつけた隣家の尼寺から尼僧が其の仲裁に來た。其の喧嘩のわけをきゝ二階に行つて丸いものを見て云ふには「やはり奥さんの云ふのはほんとうですけれ共餘り二人がさわぐものだから心配してもう今は頭を丸めてをりました」と云つたそうである。

「立ちむかう人の心は鏡なり己が姿をうつしてや見ん」と云つた樣な風で世の中は皆鏡の樣なものである。自分の心の內に心配苦勞があれば映りかへして世の中が心配苦勞に思はれる。皆さんが今住んで居られる家でそのまゝの着物でそのまゝの暮しで其のまゝの健康そのまゝの境遇で唯キリストを信じさへなさる時には心のそこから安心が湧き出づるのであ

ります。このキリストを信ずるによりて安心の生ずる理由は、

第一、キリストによりて過去の罪が消えるからである。どんなに立派な生活をして居る人も神に問ひキリストに問ひ聖書の鏡にうつす時は罪がある事がわかる。其の罪が心の中に存する間は安心は得られない。第一にこの始末をつけねばならない。清盛が老年にある時澤山の火だまがその目の前に現はれたので、にらみかへせばなほ大きくなりなほにらんだ處が消えうせたが其の後熱病にかゝつて死んだのです。源氏でも頼朝がある時馬上で橋の上にきた時安德天皇の靈、九郎判官義經の姿や辨慶の姿などがあらはれ、避ける事が出來ずに河に落ちそれが元どなり病を得て死んだと云はれて居ります。又ある時御殿に寶物がなくなりました他より入る途がないので疑は御殿女中にかゝつた、それで老女が女中をあつめ各自にこの寐衣をきる様にと一枚の帷衣を渡し、明朝早く取りしらべるから着物をきかへない様にと申付けました。翌朝又皆をあつめて取り調べをした時老女は最もしわのよつた寐衣をきて居る女中をさして、「寶物を盗んだのはあなたでしよう」と詰問した。これには流石の女中もかくしきれず皆白狀したそうである。即ち本心にとがむる處があるため臥床に入つても轉輾反側して眠られなかつたため翌朝おきた時には帷衣の寢衣は皺だらけになつて居たのである。斯くの如く本心にとがむる處ある内は安心は得られない。之れをキリストによりて赦されるのであります。

第二、從來の罪が消えると共に天の神の力により心が清くなり、本氣でキリストを信ずれば神が力を與へ給ふが故に出來なかつた善事が出來るのである以前英領インドに於ける三百萬人の犯罪種族の人民を警戒する爲に三百人の巡査がその任務にあたつて居つた。しかし、なか／＼其の警戒が困難で何の利する處もなかつた。然に五年前時の副總督が本國に歸つた際ハロルドベグビーの著書「再生の人」をよみて

れを印度にも應用したら良いだろうと考へ救世軍のブース大將に相談した。大將は二年の約束をもつて救世軍の一隊を貸し與へた。常時印度にある新聞雜誌は盛んに冷評をあびせたけれど二年間における功力は大したもので殖民地に起る犯罪種族は悔ひ改めると云ふ有樣であつた。即ちキリストを信ずる時には生れかわるのである。一人の婦人が信者となつたがキリストによりて何處か變つたかと考へて見た。考へた結果善き事はなすべきこと、あしき事はなすべからざる事と云ふ事は知つて居たがキリストを信ずる前は善をするにも自分が人からほめられるとかよく思はれるとか凡て其の目的とする處が自己にあつたが信じて後は自己でなく神のためになすと云ふ心が起り其れが爲に苦しめられてもよいから善をなすと云ふ心の起つた事を悟つたさうである。西洋の諺に「心地よき根は淸き良心である」と云はれて居る。即ち淸き心をもつたかのヤコブは石を枕としてもなほ天使が梯子を上り下りするのを夢みる事が出來た。

第三、には本分を盡す樣になるからである。如何なる罪深き人も自分の本分を有する事を知つて居る自分の本分を考へる時には嫉む事なく苦勞に思ふ事なく心配事もない。或る時英國の新聞をよんでゐると日本のはなしと云ふ見出しが目についた。それでよんで見ると其のはなしは或町に二軒の家があつて甲の家はいつも喧嘩がたへず乙の家は常にニコ〳〵として居た。ある日甲の家の主婦が乙の主婦にその理由を問ふた。乙の主婦の答へて云ふに「あなたの御宅は皆さんが御立派な方のお揃ひですから喧嘩がたへませんが私の家は不束者のより合ひで、何か一つ間違ひが起れば家内中が自分の粗忽として御互にあやまりますので靜かです」と斯くの如く自分の本分をかんがへこれを盡しその後は神の聖手にまかせ奉る時には實に安心であります。

第四、神は愛なりと云ふに從つて自分の本分を盡すのみならず他人のために盡すからである。或時一

休和尚が道をあるいて居ると一人の乞食坊主が居つた。あまり可愛さうなので少しの金をやると其の乞食は嬉しさうな顔もしないので、和尚が貰らつてうれしくないかと問ふた處がその乞食は「人にものをやつてうれしくはないか」と云つたさうである。人に何かなし得るより嬉しい事はないのであります。メリーライオンの言葉に「人は他人のために心配しない時は自分のために苦しんで居る」と、即ち人間の一生は挽臼の様なものである。豆を臼の中に入れて置けばよくまわつて粉をこしらへるが何も入れて置かなければ自分をすりへらしてしまう様に人間が他人の事をも考へて廻れば心よくまわるが自分の事のみ考へて居ると自分をすりへらして居ります。

第五、に神を信ずれば物の明るい方を見る様になる。物にはいつも二面あるが暗い方ばかり見て居ると氣がめいるが明るい方のみを見てゐると常に愉快で満足が出來るのである。感謝の心をもつて苦痛を見て居る。人は丁度鶏が石の間の豆を一つ〳〵拾つて居る様なものである。日光があたらなかつたならば體の健康を害ふと同じく靈魂も又日光にあたらねばならない。例へば夫が不品行でも、こゝで一つ神の力によつて貞女になつて見せうと決心すれば其の機會が出來るのであります。ある處に一人の歯のすつかり落ちた年寄があつたがその人に「さぞ御不自由でせう」と云へば否未だ二本殘つて居ますそれが丁度上と下とよくあひますから便利です」と答へたのであります。かくの如く常に明るい方を見て行く時には心配は消去つて終ふ。

第六、には取越苦勞がないからである。今日の心配は今日で終り神が明日の事は見て下さると云ふ信念がある爲に安心である。又死んだ後迄も神が見て下さるから誠に安心して居る事が出來る。四方から惱さるれ共窮せずと云ふポーロの言葉があるが私の解釋によれば普通の人には東西南北の四方よりないが信者には五方ある即ちこの四方に上が加はる夫故四方からきても神に目をつける事が出來るから窮する必要がない。丁度北方の雪國で四方雪で圍れてもなほ屋根をぬいて出入する様なものである神は又私共におひされぬ惱みを下さらない夫には相當の力を與へて下さるのであります。諸姉が其儘の境遇で即刻に心配苦勞を捨て安心を得らるゝのですから何卒この事を心掛けて頂きたいのであります。（文責記者）

靈的方面の進化

松宮彌平

萬物が進化するといふ事は既に爭ふべからざる事實であつて、現に我々の住居して居る此地球が今日のやうになつたのも、幾百千萬年の前から追々に變化に變化を重ねて來た結果であるといふ事は、誰人も異論のない所であります。

啻に地球が變化し來つたといふのみで御座いません、私共が實際に常に目の前に見る所のものでも矢張進化して現在の有樣になつたものであるので御座いまして、例へば私共が今日鳥といつて居る＝鳥といへば身體の表面に羽毛を被つて前肢が翼になつて居る動物は、一見して能く他の動物と見分ける事が出來るのでありますが、この鳥は最初からこの樣な動物であつたかといふと、どうも、さう思へないといふものは、現に倫敦や伯林の博物館に在るといふ、獨逸聯邦の一であるバイエルンのソルンホーフエンといふ有名な石版石の出る所から發見された或る動物の化石は、上下の顎は鳥の嘴と違つて細かい齒がありますが、前足からは立派な羽毛が生えて居て、指は三本で其の前の端に爪を備へて居ります、そして現今の鳥は尾の骨格が極めて短かいのでありますが、其化石は、尾の骨が長くなつて居て、恰度、鼠とか鰐魚とか蜥蜴とかのやうになつて居るといふことであります。學者は之を鑑定して羽毛のある所より言へば、必定、鳥に相違ないのでありますが、其骨格の工合から見ると、正しく蜥蜴であると申したさうで御座います。

この事を考へて見ますと、萬物が進化した順序として鰐魚や龜や蛙や蜥蜴などの全盛であつた時代を

經て、それから獸類が出て來るに至る迄の中間時代は即ち鳥類の全盛期であつたといふ學者の說に參照して、鳥類は蜥蜴から進化したもので、其の鳥のやうで又た蜥蜴のやうな動物の化石は、取りもなほさず、蜥蜴から、鳥へ變化する過渡時代の動物であつた事を立證する所以であらうと思はれるので御座います。

　鳥は蜥蜴の進化したものであるといふ話は實に面白い事柄であります。しかしそれは鳥類だけに止りません。其外の動物でも一々これを調べて見ますならば、皆そんな風に變化の歷史をもつて居るものである事は、私から彼是と申上げるまでもない事であるので御座います。

　而して、斯く萬物は進化發達して、現今の有樣に達したものであるといふ其內でも、我々人間ほど進歩したものは他に比類がないのでありまして、人間は即ち進化の最上であります。人間を萬物の靈長といふのも、詰りは、其進歩の程度の最高なるを意味する事であるので御座います。

　今より十五六年も前の事でありませうが、和蘭のチユホラといふ學者が、ジヤワで脊推動物の遺跡を探究して居りました時に、一の化石を發見いたしました。其化石によつて研究して見ると、大腿骨は人類と同樣の程度に發達して居て、其頭だけは世界第一の小さい頭の人種の頭骨よりも小さい動物の存在して居た時代のあつた事を證據するといふので御座います。それで、それが獸類から人間に至る中間時代、所謂猿人時代の遺物であらうといふ話で御座います。人類は、そのやうな時代から原人時代に入り、全く獸類の境界を離れ、段々に發達して、更に野蠻時代に進み、それから遂に今日のやうな境界にまで進むに至つたといふ譯なのであります。

　私は、其チユホラの發見した化石の大腿骨は人類同樣に發達して居たが、其頭骨は世界最小頭人種の頭骨よりも猶ほ小さかつたといふ事は、頗る興味ある事柄であると感ずるので御座います。私は人類進

化の秘密が此の邊に認める事が出來ると信ずるので御座いますといふものは、人類が今日のやうに進化し來つて萬物の最高地位を占有するに至つた理由は、其腕の發達でもありません、其脚の發達でもありません、全く其頭の發達といふ事に在ると信ぜらるゝからで御座います。即ちチユホラの發見した化石によると今の人間は大腿骨は猿人時代と比して其時代よりも異つた所はないのでありますが、頭骨は著しく大きくなつたといふ事になるのでありまして、もう一歩進めていへば、人類が獸類の境界を脱却して眞人間になる事が出來たのは、其頭の發達によるのであるといつても宜しい事になるので御座います。私は此頭骨の發達と人類進化との關係は決して輕々に過すべき筈でないと考へるのであります。勿論、猿人時代には現今の世界最小頭人種の頭骨よりも猶ほ小さかつた頭骨が、段々進化して今日の如く大きくなつたといふ事は別に意味もない事と考へれば、唯それだけの事柄に過ぎないので御座います。しかし頭骨の擴大は即ち人類の腦の發達であります、又た智力の進歩であります。更らにまた人間の靈的方面の發展であります。もとより、禽獸とても腦もあれば智能もある、又た靈的方面もあるかも知れません、私は今これ等の事を一々論究する積りではないので御座いますが、しかし、鳥が巣を作り、狐が穴に住ひ、カンガルーが腹嚢に子を入れて育て、烏の反哺、鳩の三枝といふ事があるからといつて、それで鳥や狐が住居權や地上權を主張し、カンガルーが育兒法を研究し、鳩や烏が儀禮道德を辨へて居るがためであるといふには誰人にも受取れない話で御座います。或人はこれ等を見て大に意味ある事のやうに推斷するのでありますが、それは只自分の考を以て推測するのであつて、彼の詩人が水の流れや、空駈ける雲行を見て、意味あるが如くに歌ふたのと異つた事はないと思ひます。要するに、それ等は人間のやうな最高意識の働によるのでないといふ事は明で、人間が動物と相違するに至つた

所以も亦これで分るので御座います。さう考へて來ますと、彼と此との相違は非常なもので、勿論、人間にも未だ獸類性の存するものが決して少なくはないし、天然力の壓迫や、境遇の制裁を受ける事も頗る多いことでありまして、其は普通に動物が一般に受けるものと何の相違もない、寧ろ之を感ずる事は他の動物などよりも强烈に感ずるかも知れませんけれども、智力、腦力、研究、工夫とか、將た靈性的方面の事になると、他動物とは絕對に相違して居るのを認めねばならないのであります。これは禽獸と大差ないといはれる程の野蠻蒙昧なものに至つても、其處へ行くと全く違つて來るので御座います。

私は嘗てエスキモーが橇を造る話を聞いた事があります、御承知の通りエスキモーといへば、寒い國に住んで居る野蠻人で御座います。それが雪車といふ橇のやうなものを造つて、犬に牽かせて交通のためにするのださうで御座いますが、いふ迄もなく、氷や雪の中に住居して居るエスキモーの事でありますから、迚も材木を得る樣な道は更らに無いのであります。そこで、どうするかといへば、馴鹿の皮を細長く裁つて、丸ぐけの帶のやうな形のものを拵へて、それから其一方の端を括つて其中へ雪と苔を混ぜて詰め込んで、其上へ水をつき込んで、また他の一端も括つて寒氣の烈しい所へ出して置くので御座います。さうすると、それが次第に氷結して堅い棒のやうになります。恰度氷柱を馴鹿の皮でくるんだやうなものが出來るのであります。そのやうな氷の棒を幾本か造つて其を組合せて橇を造る、即ち雪車が出來る、其巧者なるに至つては文明人も亦た一驚を喫すると思はれる程であるさうで御座います。これは、いくら野蠻人であつても人間なればこそ出來るのであつて、如何に賢い禽獸でも到底企及する事は出來ない事で御座いまして、前に申しました頭の發達の結果に外ならないのであります。

そればかりでなく、我々人類には神を拜し神を慕

ふ心があるといふやうな事も他の動物とは非常な相違でありまして、人類の進化が僅に手や足の進化でなく明に靈的方面にあるといふ事を確認する事が出來ると思ひます。

さう致しますならば、我々人間の進化の極度は何の邊にまで及すので御座いませうが。或人はすべての物の進化は人間に至て其極度に達したと申します。若しこれを人間の動物質の方面から見ますならば、それは必ずさうであらうと思はれます。けれども。人間が動物進化の最高位地に達したといふ事は、動物が人間にまで進んだといふ事に過ぎないので御座いまして、このまゝで完全に進化の目的が達せられたものであると致します事は、早計といはねばなりません。私は、動物質方面の進化は、僅に其前期ともいふべきであつて、まだ其後期時代が殘つて居て、其時代こそ我等人間が現在の最高位地を占めね所以である其智力及靈力の方面、殊に靈的方面に於て大々的進化をなす時代なのであると信じます。そして、此時代に於て我々は如何に進化するかといへば、蓋は言ふ迄もなく、神の形を有するものに進化するのであります。斯く考へて參りますと、人と猿とは元と同じ先祖であつて、それが猿と人とに分れたといふ說もあるので御座いますが、それと同じやうに、同じ人間のうちにも終に一は單に人類として殘り他は神の形を有するものにまで進化し行くやうになるのではあるまいかとも想像せられないでもないので御座います。

玆に、一種の論者が御座いまして、元來、人間といふものは獸類などと同じものであるから、神に肖るのなんのといふのは一の空想に過ぎないと主張するので御座います。しかし、これは、人間が現在の地位にまで進んで來た事は、靈的方面の進化によるのであるといふ事を認めない考であつて、結局、折角、これ迄に進んで來た人間の位地を引下げて、依然として人間となる以前の位地に置かんとする者であります。人間は今は既に嘗て經由した頭の小い時

代に屬するものではありませんせん向上進化の道は明白に開けて居るので御座います。昆蟲時代から漸次進化し來て終に人類にまで進化したやうに、私共は、また靈的方面の進化を遂げて神にまで達する首途に立つて居るので御座います。此處に人生の希望もあれば勇氣も出るので御座います。

人間は、もとは、裸體で居たものに相違ありませんが、それが何故現在のやうに衣裳を着けるやうになつたかといふ事を調べて見ますと、三個の理由があると思はれます。即ち其一は何等かの必要があつたからで御座います、其二は身體の裝飾のためでありますす、そして第三には羞耻心といふのでありますす。私はこの事を考へて見ますと、このうちにも亦た頗る面白い意味が含んで居るやうに感ずるので御座います。

人間が衣裳を着るといふ事は、これも動物社會に於ては人間ばかりの事で御座いまして、人間がすべての動物と區別せられて其最高の位地を維持する上に大切なこととなつて居るのであります。そして、この衣裳を着けるといふ事が、唯だ其必要に基くためばかりでなく、又た、單に身體の裝飾のためばかりでもなく、羞耻心によるといふのは、我々人間が、一般動物のやうに、僅に美しい羽毛によつて飾られたり、防寒のために深い毛皮に包まれたりして居るのとは違つて、其以上に進んだ理由によつて羞耻心＝道德的靈的の方面の要求ともいふべきものがあつての事であるといふ事をも知るので御座います。私は、單に必要上とか裝飾用のためのみであつたならば、人間は衣裳を脫ぎ棄てゝ、放埒な氣儘勝手な禽獸の昔に復つた時があつたかも知れませんと思ひますが、羞耻心に捉へられてからは、どうしても、衣裳を脫いで昔の醜い有樣となつて、天下を濶步することは出來なくなつてしまつたと思ひます。そして、其羞耻心の發達に伴ふて、身體の一部に纒つたものも漸次身體の大部分を被ふやうになり、終に全身を包むで其襟元を合せるやうになつたと信ずるので

御座います。

前にも申しました通り、私共人間の進化の最高極度は靈的方面の發達に在るのでありまして、我々は神の如き品格を備へるに至るまで、向上進化するものであると信ずるのでありますが、それは恰度嘗て裸體であつた人間が衣裳を着けて其品格を維持するやうになつたと同様の次第であらうと思はれるので御座います。聖書に私共の品性の成就に就て「壞る者は必ず壞ざる者を衣、死ぬる者は必ず死なざる者を衣るべし」と書いてありますが、この「衣る」といふ言葉は私が着物の事を申上げ、又た、着物を着ることによつて人間の人間たる品位を維持する一の理由となつて居ることに思ひ比べて、頗る興味あることを感ずるのであります。言換へれば、私共は身體の上に於ては衣裳を着る事によつて人たるの品格を維持し、靈の上に於ては壞ちざる者死なざる者を衣るによつて、完全なる品性を作るに至るのであります。

神らしい品格、これは實に人間進化の最高極度であります。其品格なるものは「壞ざる者死ざる者を衣る」によつて得らるゝと致しますならは、私共は如何にして之を得且失はないやうにする事が出來ませうか。其處に所謂私共の羞耻心の發動がなくてはならないので御座います。

其羞耻心となるものは何でせうか。即ち吾人の眞面目に神を求め基督を慕ふの心で御座います。其奥底に響く碎けた祈で御座います。此等のものは必要上や裝飾用の要求ではありません。此心の發動する所は即ち「壞ざる者死ざる者」に契合して之を着物の如くに衣てまた脱ぐ能はざるに至らせるのであります。此處に生命があります。生命のある所に活動があります。進化があります。發達があります。

實に、私共動物性に於て進化の極に達した人間は今や、更らに靈性の方面に於て大なる進化を遂げねばならぬ立場に立つて居るのであります。私共は各宜しく此等の點に着眼し奮勵努力して以て之を全ふすべきではありませんか。

瑞典に於ける萬國基督教女子青年會大會

在米　渡邊百合子

歐洲開戰一ケ月前に開催されし萬國女子青年會大會の報告は當時渡邊氏より寄送されしも行違ひありて本誌に掲載せざる中に紛失したり、今新に大略を再記されしを謝して左に掲ぐ。歐洲交戰の今日に於ても基督者は何國にありても友情を捨つる者に非らず、彼等によりて眞の平和と親睦の國際間に來たされんを祈るものなり。萬國女子青年會々員間の消息の美しき此戰爭に依りて友情を溫めし感あり。然れば今日この一篇を掲ぐるは强ち後の祭にも非ざるべし。(記者)

六月は獨逸國ブレマン市に上陸、別に税關はやかましくもありませんでしたが滑稽でしたのは私共が船で食のこした御菓子に五十仙程の税をとられましたのです。ブレマン市から直ぐにハンバーリに參りました。汽車は米國に比べると小さくて玩具のやうで六人づゝに室がしきつてあり六人の旅には好都合です。すぐに四方の景色に氣がつきました畑が小さく區ぎつてあり、又處々に藁屋根など見へて日本の田舍を思ひ出しました。ハンバーリで一寸市の夜景を見物しました處飲食店屋や茶店らしい處には家の前に青く塗つた大きな桶のやうな鉢に植木が青々としてをつて凉しさうに見へました。停車場で軍人や警官の服に氣がつき直ぐ又日本の軍人を思ひ出させられました。翌朝はデンマークの都コペンハーゲンに着しましたが途中私共のこの汽車自身が船に乘つた處もありました。六月九日には一日コペンハーゲン市を大急ぎで見物に費し、それから又船と汽車で愈々大會の開催されるスタックホームに向ひました。汽車中で朝食には御茶とパンをスヰーデンの女が賣りに來ます手まねや色々でいくらだか聞く笑止しさ。皆うれしく大いそぎで仕度をして窓からあちこちと眺めながら汽車の目的地に着くのを待ちました。スヰーデン特色の海老茶色の百姓家が見へ始むと思ふや九時過ぎにいよ／＼スタックホームの停車場なので通譯をさがして荷物の事や色々の事をまかせ直ぐにホテルに參りましたら既に御苑での園遊會

の御招狀がありましたので皆急いで旅の埃をとつて午後四時に宮城に參りました。出掛以前に長の道中の垢おとしに御湯に入りました。大きな桶に木の板が渡してあつて頭をのせるやうになつてをりましたさもなければ深くてブク〳〵をします。扨宮城では丁度日本の樣に兵士があちこちに敬禮をしてをります。愈々御苑に參りましたらばもう大勢來て居られその時はじめてこの園遊會が青年會の大會の人々の爲に態々開かれた事を承知しましてなほ嬉しい氣がしました。皆胸に徽章をつけて姓名と國名とがわかり紹介を待たずに御互に話し合ひました。どんなに大勢から河井先生を知つて居るかとか伯林に御出でになつた時逢つたとか、云はれたか知れません。初めて色々な英語のふしも、外國人のブロークンイングリッシユも聞きました。佛語、獨語スヰーデン語英語が一所に耳に入るので自分と話して居る人より時には少しもわかりませんでした。可笑しい事は英國人の話して居るのをきいて外國人が話して居るのだと思ひました。併し國はちがつても語は違つても同じ目的をもつて同じ御旗の元に集たので御互に親しいやうな氣がして話しました。やがて喇叭がきこえると、皇太子殿下と妃殿下は陛下と皇后陛下の御名代で御出ましになりました。すぐに特別の代表者に拜謁を賜はり私も其の中の一人でした。それからは茶菓の饗應があり暫くして歸りました。間もなく午後八時スヰーデンの青年會の催の歡迎會に參りました。これは特別の場合でなければ開かぬと云ふ華族舘にありました。壁は一面に騎士の紋の額がかゝつて居りました。辯士は主にスヰーデンの人々でした唱歌隊の歌が第一ではじまりました。其の美しい聲音譬へんものもありません。この夜の御話は皆通譯されませんでしたのでわかりませんでしたが、會の精神でみたされました。皇太子皇太子妃殿下も、他の宮樣方と御臨席遊されました。他所に御出の處を一日此の會の爲に御延しになつたとの事です。辯士の一人は親王の御一方でした。この御方は大變に熱

心な信者で特に青年會に興味を以つて御出になり只今の陛下の兄君でいらせられるので一體は位につかれるべき御方ですのに、どうか平民と一緒になりキリスト教の爲に働きたいと云ふ御望みから位は弟君に讓られスヰーデンの基督教信者の爲に働いて居られる御方です。何だか上下で基督教を奬勵して居るやうに思はれ早く日本でもこの眞の教がかうなればよいとつくゞ思ひました。會の後で十時に夕食が出ました。十時と云ふても北方での夏の事でまだ明るいのです。スヰーデンでは朝九時に朝食、十一時にお茶のやうなもの（御菓子の様なパンの樣なものと御茶）四時に御中飯、これが御馳走です。六時頃にまた御茶、十時に夕食となつてゐます。ほんとのスヰーデンの夕食の料理を申ますと、はじめに野菜の酸のものとか、生魚の酸にしたのや色々出まして主な御皿が出ました。米國の御馳走と材料はあまりちがひませんでしたが味のつけかたが一寸しつこう御座いました。其の夜は十一時すぎに歸りましても恰度日本の夏の夕方の六時半か七時位の明さです。

大會は六月十一日十時に開會、六月十八日の午後三時に閉會でした。演說は佛語と英語が多う御座いました。スヰーデン語また何語で話されても佛英獨語に譯されますから御話の意味はいつでもわかりました。演說は皆報告されるそうですから少し計り今申上ません。廿三ヶ國からの代表者でした。そして五十の違つた語が話されたさうです。會の初めから終りまで何時でも一般と云ふ事を感ぜずには居られませんでした。時々午後など近くの各所を見物が出來る樣に用意がしてありました。御承知でせうがスタックホームは小ベニスといはれて居る程美しいのです。水で圍んだ市です。市は五つ六つの島から出來て居るのです。市外にはそれは美しい處があります。土曜日の午後、全體がムレーレン湖を船で古城を見に參りました。湖の樣子、あちこちにある小さい島や入江だので日本の景色を思ひなつかしく存じましたが、それでも木の枝が日本のやうに廣がつて

居らないので、矢張スヰーデンの景色だと思つて眺めました。日本に行つた事のある人々は得意になつて日本の内海のやうだなどと云ふて居られました。島にある古城を船から見た景色何とも云はれません船を下りて城の内外をあちこちゝ歩きまわりました時に、或るロシヤの男爵夫人が私に紹介されると一寸親しげに「私の息子はしばらく日本に居りました」と云はれましたのでいつも人が日本に參りましたとか、居つたとか私は聞くと何だか嬉しくて話がおもしろくなりますから此時も乾度嬉しい様な様子をしたでせう。すると「戰爭の時日本に捕虜になつて」と云はれました。私はもう戰は終へましたそれに基督教界には戰爭などはありませんなどと大膽に何が起りかゝつて居つたかも知らずに申しました。兎に角息子さんは日本でよく取扱はれたと喜んで居られました。先づかれこれして夕方十時半頃美しい入日を船から眺めながら歸へりました。六月十四日の日曜日の午後には聖晩餐式に出席しました。ルーテル派の敎會、儀式が嚴かでした。或る夕方は市外の公園のやうな處に參りました。此處も實によい景色でした。高い處で市の様子がよく見へました。スヰーデンの古流舞踏を見ましたが戸外に地から一尺程の高さの丸い臺が出來て居つてその上で躍つて居りました。無害なダンスだとつく〴〵思つて見ました。日本に夜半にする西洋の舞踏會の風がひろがらなければよいがなどと思つて居りました。おそくかへり床につく時でも未だ暗くありませんし、いつも目の醒る頃(七時頃)は大陽が上つてから四時間位してからですから何だか夜を久しく見ない様な氣がしました。一度病院を訪問します時がありました。宮様や妃殿下方も案内者の一人でしたのには驚きました。然も看護婦の一人となり他の看護婦と同じ様に働いて居られる宮様もありました。

スヰーデンの人々はほんとに單純で親切でした。青年會に關係して居る人は勿論、逢つた人々は皆懇切であると云ふ印象を私は受けました。何でもその

快くして呉れた事は代表者皆が感じたらしゆう御座います。凡ての用意もよく出來て居りました。去る二ヶ年間も此の會の爲に各方面に準備をして居つたさうです。六月二十日には英國の方々と共にスキーデンを去り英國を指して出立しました。北海を船で六月廿二日には英國のノーウウチに上陸いたしました。この日は戴冠式の日だとて港の船は旗できれいに飾つてありました。此處からロンドンまでは一寸二時間程汽車、本を讀んだり話を聞いたりして親しい氣のする英國の土地を踏むとは夢の樣でもあるし又何だか嬉しう御座いました。停車場でも何處でも何となく氣樂に感じましたのは英語だけしか耳にしなかつたからで御座います。例によつて汽車中二時間は殆ど外をながめて居りました。畑の樣子のまた違います事、第一に氣が付いたのは生垣で畑がくぎられておつたのです。又家もない田舍道の兩側に青青と樹の生へて居つた事です。又或る所は一面に罌粟が野生になつておつた事で御座います。ロンドンからはバーミングハム市に直に參りました。一寸十日間程靜かに休ませて頂き居る中に新渡戸夫人の兄君エルキントン御夫妻にはからずも御目にかゝりました。無論日本の話をして樂しう御座いました。又此處に滯在中にシエクスピヤの生地を見物しました東京女子青年會のワトネさんが御歸國中とて御招きを頂きましたので七月一日に御家に參りました。無論停車場に迎へて下さいました。嬉しくつてしばらくはものもいへませんでした。御家や御家の樣子ははぶいて置きます。ワトネさんとは初めから終りまで日本語でした。日本語が御上手になつたのにはおどろきました。久振りで隨分さわぎました。知らない人々の處を訪問してワトネさんの處へきましたので何だか氣が樂になつて一層に樂しう御座いました日本の青年會の樣子も伺ひまた御一緒に御祈もしましたワトネさんがあれ程にも日本の青年會の爲を思つて御出で下さる事を知り實に有難く存じました。ロンドンに一週間程見物に出かけました。今から丁

度五年前に河井先生が居られた萬國女子青年會本部の事務所にも參りましたら何とも云へぬ氣がしました。ロンドン市の米國の市と違つて居るのは實に大したものです。テームス河から見た國會議事堂は想像以上でした。急に歸米の事となりまたワトネ樣の處に參り、七月十八日まで御一緒、都合十二日程御一緒に樂しく過しました。十八日にはロンドンまでおくつて下さつて船の私の御連れの萬國女子青年會本部の幹事のミススペンサーに停車場で私を托して下さいました。その夕方に出帆いたしました。相變らず船にもよはず樂しく航海をして米國に歸へりました。今より思へば面白かつた夢の心地がして居ります。

旅行者の友初年度報告書

（大正二年十二月十八日より
大正三年十二月十七日まで）

何れの都會にても其發展に從ひ種々樣々の危險誘惑の伴ひます事は自然の勢で御座います。殊に人出多き雜沓極まる停車場の如き處では旅行慣れぬ婦女を親切に世話をして其便宜を計るは勿論又或場合には保護、救濟等の必要も澤山に御座います。東京基督教女子青年會は此種の事業の必要を深く感じ東京に中央停車場の開場と共に旅行者係を設置せんと夙に希望して居りました。然るに出獄人保護主任の原胤昭氏や警視廳の丸山鶴吉氏等はかゝる保護或は豫防的事業は一日も早く着手せんに如かずと色々永年間の經驗を引照して御奬勵下さいました。そこで第一着に當時の鐵道院總裁床次竹次郎氏を訪問して事情を陳述し大なる同情を得て遂に大正二年十二月十六日に東京市上野停車場に是を開始する事と致しました。先づ婦人救濟事業に經驗のある林房子を其擔任者とし本郷區湯島天神町一丁目廿四番地に一軒を借りて之を同人監督の下に被護者の止宿所に當てました。事業は到底一人の手にては廻り兼ねる樣になり本年二月に松崎滿喜子を係員に致し十一月に於て

田中爲子を雇ひ林主任を補佐せしむる事となりました。是等の保護者には「旅行者の友」と云ふ徽章を着用せしめ朝夕交代にて停車場に出し又救濟せし者の處分を任せてあります。最初よりして下谷警察署又停車場内の職員赤帽に至るまでに同情を得し事を感謝して居ります。

抑も上野停車場は新橋よりも遙に旅馴れぬ者、又保護を要する旅行者多きは畢竟工業地又凶作地は東海道よりも東北地に多くあるが爲從つて上野驛に出入する者の中注意を要する者が比較的多い次第でありますのと、加之本會事業開始の今日兩停車場に働く資力を有しませんがために識者の指導により上野を中心として着手した次第で御座います。

滿一ケ年間に於て二人の係員の手を經て止宿せしめし者百二十七名にして其中三名のみは親の許可ありて上京せし者餘は皆様々の原因より無斷出奔とは驚くべき事ではありませんか。宿泊日數は少きは一泊多きは十二日間にて本會は一人一日につき廿錢の費用を支拂つて居ります。爰に過去一ケ年間の情況概略を統計表に擧げますれば。

○縣別表（出立地による）

新潟	一七人	秋田	六人	石川	二人
茨城	一六	富山	五	岐阜	二
栃木	一五	埼玉	五	靜岡	一
福島	一二	長野	五	東京	一
山形	八	青森	四	京都	一
宮城	八	北海道	三	山梨	一
千葉	七	岩手	三	計	
群馬	六	廣島	二		

○止宿數（大正二年十二月は十八日より 同三年十二は十七日まで）

大正二年十二月	二人	五月	一二人	十月	一五人
大正三年一月	五	六月	一一	十一月	一二
二月	一一	七月	一八	十二月	四
三月	一六	八月	八	計	
四月	一五	九月	一三		

○年齡別

八歲	一人	十三歲	三人	十六歲	七人
十歲	一	十四歲	四	十七歲	一七
十一歲	二	十五歲	三	十八歲	一二

十九歳	一八	二十五歳	四	六十一歳	一
二十歳	二八	二十六歳	一	六十八歳	一
二十一歳	四	二十八歳	一	七十二歳	一
二十二歳	八	三十歳	一	七十四歳	一
二十三歳	四	三十六歳	一	七十六歳	一
二十四歳	三	四十四歳	一	計	

○上京の理由（事情の重疊したるものありて一々區別して人數を判然たらしむる能はざれば類別のみに止む）

境遇不滿　貧困　無理結婚　家庭不和　不貞操　工場に雇はれん目的　奉公の目的　縁者を便りて　雜

○身分別（同上）

女工　農女中　既婚者　未婚者　寡婦　離婚者
無職業者　狂女三

○上京につき親の承諾を得たるもの及得ざるもの

承諾を得たるもの　三人
承諾を得ざるもの（無斷家出）　一二五

○處分表

歸國せしめたるもの、五九　奉公せしめたるもの、六
一工場へ入りしもの（本人の希望にて）六　養老院に送りしもの、四○　施療せしもの、一三
其他　救世軍に紹介　旅費、食費、食品、電車及人車代、旅籠料、衣類の給與、行先地へ送り屆け、荷物處分、警察出頭、代書等は數知れず

右の表にて一般の事實が現はれて居ります。之に依ると妙齢の婦女の數が一番多く又春秋の季節が多數を占めて居ります。先づ是等の婦人を係員が目付けますと第一國元に紹介して旅費を取よせ或は本會にて辨じやるかして歸國せしむる方法を第一とし次は兩親の許可を得て奉公をさせる事にして居ります多は田舍の人々故一度の手紙にて事の落着は六ケ敷く中には數度催促の後始めて解決する樣な場合が普通で御座います。其間本會の宿泊所に宿めをいて保護を致します。割に皆從順にして亂暴はしませんが無分別と沒常識とが著しう御座います。若し無理結婚の爲家出せしものであると大抵は實家より歸國を頼み或は迎へを遣す樣で御座います。又東京を花の都と誤解し容易く金儲でもなし得んと思ひ輕擧な虚榮心で家出せし者の如きは都會の頻繁なるに第一驚き又都の奉公は田舍の働より窮屈さを感じ却つて歸國を願ふ者もあります。勿論世の中の淫風に馴れ眞面目なる生涯を喜ばざる自墮落の者が私共の手にか

かる事は稀でありますが彼等の處分は非常に六ヶ敷く折角世話致しても大抵奉公先より無斷にて行方不明となり或は宿泊所滯在中に監督者の留守をねらひ何處にか逃走する等の事になります。然し是等は極く少數で大概は歸國の後は禮狀位はよこす樣であります。係員は可成工場に行く事を差止めますが本人共の堅き希望と兩親の承諾のある場合には指定の工場に連行き責任者に手渡を致す樣にして居ます。大多數は相當な奉公先を見付て世話を致します。皆實着に務めるといふわけではなく二三日にて歸り來る者が多く、病氣になりて下るもあり或は親元へ引取るのもある。却つて雇はれし家に迷惑かくる事も往々で御座います。是等の骨折は一通りでは御座いません。又折角適當なる家に奉公せしと思ふ間もなく吞慾の父親が金の無心に行き無理やり厭がる娘に暇を出させたり又娘に代りて此方より親元に請狀を出し娘を返せば不要世話を厄介娘の爲にせしとて大立腹の手紙と共に又も本會に娘を戻しよこす如き薄情の親あるかと思へば七十以上の老母を路頭に迷はさしむる不幸の息子あり寡婦の僅かなる貯蓄を奪ひて不幸の遺族を死に陷るゝ者、田舍の子女を誘拐する惡漢、自ら進んで魔窟に投ずる女子、數へ來れば限なき悲慘の樣々を過去一ヶ年間に經驗致しました係員等は婦人や子供の世話を專にして居るのではありますが時々男子にして病氣とか無錢旅行者又は兩三日絶食せし人々の世話を停車場内で賴まれる事が度々で御座います。不幸なる人のある場合には巡査や鐵道院係員等は私共に依賴し何とか此場を救助し呉れとの申込捨がたく旅費を支辨する事もあり、蕎麥、辨當を與へる事や又食料を持たせ行先に案内する事幾度と數知れぬ程で救世軍に紹介致す場合も屢々で御座います。

斯く一方に鬼々しき社會の優勢を知るにつけ猶一層世の博愛者に訴へ社會個人の救濟を有力ならしめ度いと切望致します。幸にも本會は善き同情者後援者を得て今日にまでなりまして「世は情」なる諺を經

驗して居ります。特に本會は聖ヒルダ養老院に深く感謝を表して居ります。本會の宿泊所とて手狹にて數人の者を長らく滯留さする便宜はありません。然る處同院では月僅か一人三圓の割にて數人を引取り且つ病人は赤坂病院に入院せしめ全快者は奉公に出し老人は同院にて手仕事をなす等の便宜を與へ斯くして此事業の發展に大なる援助を與へ下さいます。

僅か上野の一停車場に於ても爲すべき事かく數多く御座いますから中央停車場の開場後は如何ばかりか此種の事業を擴張せしむべきものと思はれます。本會は既に鐵道院に赴き新停車場内に於て此事業に便宜を計られん事を申込んでありますす故必ず適當なる場所を與へられ廣く公衆の便を計らんと期待して居ります。過去一ヶ年間諸兄姉の御同情により幾分なりとも社會に貢献なし得しを感謝致すと同時に、又將來事業擴張に伴ひ費用も增加致します事ゆゑに益々皆樣方の御同情を仰ぐ次第で御座います。

吁、朝兒孃

木岡莞爾

怜悧なる品質が兩の眼に輝き、愛嬌が唇に動て居る、八歳になる可憐兒西森朝兒。孃はいつも石原牧師の三歳の坊ちやんを、心行くばかりに終日遊ばせて居た。孃は其無邪氣の内にも、何となく犯ずべからざる神の子たる光を放つて居つた。孃は石原牧師の住居が殆ど吾家のやうであつたから、誰々が來たといふ事もよく知て居る。もし他人が『朝ちやん、今日は何人が來たの』と問へば、孃はきつと『知りませぬ』と答へる。之れは兩親の躾かといふにさうではない。天賦の或る超越した精神の發露である。孃はいつも日曜學校が濟むと、禮拜に殘つて居たから、『あれでも說敎が分るだらうか』と、敎會での疑問の一つになつて居つた。孃の母は殆ど敎會に出られた事がないが、孃は此慈母に『今日は石原の伯父さんが斯ういふ說敎をなさつて』と諄々と說敎の筋道を話すのであつた。孃の體質は餘り丈夫でない。血色もよくはない。併し腦は不思議に發達して居たものと見える。拙著『信仰と實驗』に揭げた「登榮子」と好一對である。又エス十二歳の時のエルサレムの宮の記事をも聯想せざるを得ぬ。『蜻蛉釣り今日は何處迄行つたやら』七月の暑い眞盛り、一日いつもの朝ちやんが見えない。石原の坊ちやんは『朝ちやんは〳〵』と慣かつて泣いて居る。朝の九時頃、心に苦痛を負ひ、石原へ來られたのは西森夫人、『朝兒は朝夜から發病危篤の容態』との知らせであつた。急性の腦膜炎只譫言ばかり云つて居る。昨日の神の子も今日は人の子たる意識もない。兩親の胸の中は張り裂くばかりであつたらう。父は最早息み絕えたるを思ひ、孃の耳に口を寄せ『朝ちやん〳〵』

と十回ばかりも叫ばれたが、やがて孃は氣が付いたと見え、鈍如したカのない兩眼を開いた。父は靜に死の影の近付けるを告げ、尙氣遣てあつた彼の信仰をも確められたが、孃は杜鵑の血を吐くやうに『エス我爲に十字架に死せり』と信仰の結晶した一言を洩らした。夫れのみならず孃は更に父に向ひ『お父さんに尋ねる事がある』と極めて威嚴のある問であつた。父は『どんな事』と畏る〳〵答へた。孃は『幾回前の日曜日にお辨當を持たずに出なしだが、中食はどうなさつたの』との問、父は『急いて出たから辨當を忘れた。中食は蕎麥屋で濟ました』との答、孃はいと儼に『日曜日ですのに』との底力ある一言に、父の心の肉碑に彫り付けられた誠の一つとなつたのである。やがて母に向ひ『お母さん日曜日に野菜を買つた事があるでしよう』と、流石に母には優しい言葉であつたが、母は痛く急所を刺され、心を深く刳られたのである。愁雲一室を蔽ふて、暫し心の暗黑と爲れる時寔に光ある言葉箆によつて畵かれた誠の文となつた。話が遡るが、斯る神に近い、しかも小さき信仰夫れ相應に精練された少女にも、四國の事情と友の感化は免かれぬものと見え、彼の住居が町家であつたから、所謂町ッ子の夫の如く、一錢二錢と酸漿駄菓子の味を覺えた。父は痛く之を憂ひ、徐に矯正せんものをと、孃に向ひ『之れから五厘與げるから、一錢は貯蓄しませう』と約され、孃の幼な心にも喜を滋へた。父は更に之を三厘に減じ、一錢五厘を貯へる事とせられたが、數月の後其貯金が三圓になつた。父は『何を買はうか』と問はれた。孃は『着物を』と云つた。孃も平素から他人の着物よりは劣つて居た事を小供心にも、竊に耻かしく思ふて居たに違いない。父は此等に氣付かず、着物ならもつと貯蓄して、クリスマスの時によいのを買て上げやうと云はれたが、孃は之れにも滿足したのであつた。クリスマスには未だ程遠き星飛ふ夏の夕、孃は最早望なき重態となつた。父は此事が心懸りであつたから、是迄の貯金三圓餘を或る寄附になすべく告げられた。孃は力ある點頭して滿足の意を表したのであつた。

孃は常に沈々たる淸夜に憧れ、星の名を知るをこよなき樂しみとして居た。彼は發病後第三日、遂に天の彼方に煌めける主の御冠の玉となつた。石原の坊ちやん今は三十三歲、朝兒ちやんは『永生』てふ齡、孃は今や主の聖座で光ある衣を重ね、クリスマスを祝しつゝある事と信ずる。噫『主に在て死ねる死人は幸なり』(默示十四章十三)

(附言)拙著『信仰と實驗』に就き、女子靑年會の諸姉妹の優しい、しかも熱心なる御同情に對し、ほんとうに嬉しく感謝しました。既に十一月中に二千部賣盡し、十二月に更に千部印刷しました。どうぞ喜んで下さい。又更に盡力して下さい。どうか之れで求道者を導いて下さい。著者の住所は十二月號の廣告によります。

花の籠

（一）もう十分だけ

　これは阿母さんが自分の小さな子につけた名前です。妙な名ではありませんか。
　二三年前にフランスの貴族のナポレオンといふ人が、南アフリカのズルランドの英國の軍隊に加はりました。大ナポレオンの名をとつた丈に彼も大の戰爭好きでした。ところが其頃フランスにはちつとも戰がありませんでしたから、このナポレオンは、イギリス人がズルランドで戰爭をして居るときくと、早速その加勢に出かけました。かうして彼はズルランドで戰爭をする様になつたのです。
　或日彼は少し許の兵士をつれて、陣營から乗り出しました。彼は貴族でしたから、勿論兵士を指揮することを許されてゐたのです。廣々とした國で、彼等の圍りは、みんなツールの敵兵ばかりで、而もそれが非常な數でしたから、ナポレオンがそこに居ることは、安全ではありませんでした。イギリス兵の一人は、
「我々は陣營へ歸つた方がよろしうございませう。此處に居たなら敵に捉まつて了ひませう」
と云ひましたが、その貴公子が、
「もう十分だけ居て、カフエーを飲まうぢやないか」
と云つたので、みんな留まりました。ところがその十分が經たないうちに、ツール兵が來まして、小戰鬪が始まり、貴公子は戰死して了ひました。逃げる時間は十分あつたのでしたけれど、彼は「少し待つて」と云つたのです。そして待つ間に間に合はなくなつて失つたのです。
　可愛相な阿母さんは、彼が戰死の顚末を聞いた時から仰しやいました。
「それは、彼が小さい子供の時からの、癖でした。いつでも待ちたがりまして、決してすぐ床に就くこともなければ、また、朝すぐ床を離れることもありませんでした。いつでも、「もう十分だけ」といつてゐました。時々朝呼び起こされても、あんま

り眠くて、口のきけない時は、小さい兩手を擧げて、十本の指を擴げて、もう十分丈待つて下さいといふことを知らせるのでした。それで私はあの子をいつも『もう十分丈』と呼んで居りました』

少年時代は人を造るものです。この貴公子の子供の時に始まつた習慣は、年と一緒に進んで、とうとう彼を殺すやうになりました。

彼の阿母さんにも責はあります。阿母さんは子供が十本の指を擧げる小さないたづらを『敬禮』といつて笑つて居たのです。けれど後來に阿母さんは泣きました。彼にも責はあります。彼は自分の惡るい事を知つて居たからです。これはどんなに高價なものでしたらう。この愚圖々々する馬鹿な癖の爲に彼は命をとられたのですもの。

この話を讀む少年少女諸君の中にも、『もう十分だけ』といふ方がありますかしら。

(二) 木はどうして落ちた?

數年前に私はメーン州の森を通つて居ました。メーン州は森で名高い所なのです。ところが立派な大木が澤山倒れて居ました。私は倒れた一本の大木の前へ來たとき、一體どうして倒れたのかと、不思議に思ひました。その圍りには澤山の木があつて、而も幾本かは倒れた木よりずつと小さいのに、ちつとも倒れては居ません。其邊には大嵐の跡も丸で見えません。而も其處に、高い立派な大木が、地上に横はつて居るのです。何の大能力在つてこの木を倒せしぞと、私は奇しく思ひました。

私は仔細に點檢した後に、理由を見つけました。吹き倒す風が丸でないのに、何してそれが倒れたかが解りました。それは斯うです。幾年も前に、小さい一つの虫が、その樹の皮を突破つて、樹の纖維へ突入り始めましたのです。何でもない事じやありませんか。たつた小虫一匹ぐらい。けれど虫はだんだん多くなつて來て、纖維までも食べました。そして其上其上とやつて來て、多勢で食べ續けて居ました

然して樹がすつかりがらん洞になるまで、喰べ續けました。それなのに、樹の皮はしつかりと何ともないやうに見えて居ました。虫はたゞ樹皮を突破つた許りで、食べはしないで、樹の中に住んで居たのです。誰でも通りすがつた者は、丈夫で強い巨きな木だ。百年はもつだらうと思ひましたでせう。けれど中は腐りぬいて居たので、虫は一本の纖維すら餘さい位にして了つて居たのでした。

ある晴れた夏の日、ほかの木がみんな微風に唱つて居た時、不意に倒れたこの樹の、凄まじい音に、栗鼠は怖れ、鳥は飛んでいつて了ひました。これは風が強かつたから倒れたのではなくて、木が弱かつたからです。靜かな微風がすーつと渡つた許りなのでしたのにこの木は心が腐つて居りましたから、それで死んで了つたのです。

大人が、時とすると、不意に大きな怖ろしい罪を犯すことがあります。欺したり、僞を吐いたり、泥棒をしたりすることがあります。よその人のお金を澤山とつて逃げたり、新聞にそのことを一ぱい書かれたりします。世間の人達は、その人が、どうして然なになつたか。どうして急にそんなに惡くなつたかと不思議がります。誰でもその人を善い人と思つて居たのに、不意に大した惡者になつたのですから

ところが、その人は、不意に惡者になつたのではありません。彼はあの樹のやうに、誰一人知りませんでしたけれど、長い間に、だん／＼さう爲つて來て居たのです。

彼が惡るくなつて了ふずつと前に、小さい一匹の虫が彼の心に入つたのです——うそとだます虫が、彼はまだ子供の時に、一つの虚言を吐いたのです。一度吐いてからあとはずん／＼らくに吐けました。彼は人のものをとりました。最初は何か小さい物、多分澤山とるのは怖かつたからでせう。二三錢かさもなければ、よその子の玩具くらいでしたのでせうそれから彼は初めの虚言を隱すために、又虚言を吐きました。彼はほかのものが欲しくなつて又泥棒を

しました。これは、初めの虫のほかに、又ほかの虫が住みに來たのと同じことです。虫はどれもみんな其人の正直な心を一緒に食べ盡くして居たのです。斯うして幾年も經ちました。其人はいつでも、善人らしい風をしますし、世間でも善い人だと思つて居たのです。それと云ふのも虫は心を食べ盡しながら樹の表皮はそのまゝにしておいたからです。

けれども或る日のこと、特別な試誘の風が吹いて來ました。その人は抵抗する力が少しもありませんでした。何故と云へば、その心には力がなく、腐つて居たからです。ですからその人は倒れて了ひました。世間の人はみんな不思議がりましたが、神様はその人が長い間もう倒れるばかりになつて居たのを御存じだつたのです。

無事な方法は唯一つ、その樹から、その小さい虫を除つて了ふことです。たゞの一度でも虚言を云つて、あなたがたは正直といふものを、なくなしてはなりません。たゞの一度小さい物なりと、あなた方のものでない物は、決してとつてはなりません。唯の一度でも、惡るい考へを心に住ませてはなりません。あとからあとからと同じ様な考が起ります。決してから云ふことをなさらなければ、あなた方は強うございませう。何故といへばあなた方は潔白だからです。そして誘惑の嵐が、あなた方を倒すことはありますまい。

(三) 飛ぶ鳥

或る日、私は新らしい教會の中に居ました時、一羽の小鳥が、如何にもひどく怖ぢけた様子で、足場の材木の間を、彼方此方飛んで居るのを見つけました。私はあはれな小鳥を可愛相に思ひました。然してどうかしてそれを怖がらせずに、そつと抑へて一寸抱いてやつて、それから外へ出る道を教へてやりやうはあるまいかと思ひました。けれども小鳥はずつと高く天井の方に居まして、あんまり怖ぢけて居るので、誰も近くに行きやうがありませんでした。

小鳥は建物の中を前後左右に飛び廻り、今窓に突きあたるかと思ひますと、今度は壁にぶッつかりまして、空しく、輝やいた美しい日光の中へ出やうと、路をさがして居りました。

私は可愛相な小鳥が氣の毒でした。何故と云へば開けつぱなしの戸があつたのですもの、若し私が鳥の言葉さへ知つてましたら、話してやりませうものを、話さうにも、何しやうも知らなかつたのでした。

その翌日、私はまた教會へ參りました。私は第一番にあの小鳥をさがしました。すると其所に、可愛相なくたびれた小鳥は、又も前後に飛んで、壁や窓に突きあたりながら、外へ出られないで居ました。きつと教會の中で働らいて居るよい人達が、可愛相な小鳥が食物を見つけられるやうにと、自分達のお辨當の屑を少しおいてやつたのだと私は思ひましたけれど、可愛相に、小鳥は囚虜なのです。日は輝いて美しうございました。可愛らしい小鳥は、神様の大きな廣々とした空氣の中へ、それは出たがりました。私もそれをほんとに願ひました。

さて、やがて小鳥は出て了ひました。みなさんは如何云ふ風に出たとお考へになります？　小鳥は疲れて、下へ下へと飛び下つたのです。すると其處に戸があつたのです。それで小鳥はすぐさま行つて了ひました。

まあ、何て容易い、わけのない事でせう！　戸はいつも其處にあつたのですのに、人や鳥が入つたり出たりする爲に、戸は其處につけてあつたのでございます。けれど小鳥はその道が、どんなにやさしいか知らなかつたのです。一生懸命に、四方八方と出やうとしながら、可愛相な小鳥は、外へ出るには遮二無二やらなければならないと、思つたのでした。可愛相に、戸が始終開いて居たことさへ知つて居ましたなら、さうはしなかつたでせう。もう少し控へ目に飛んで、下の方へゆくのを滿足さへして居たならば、それこそ、よつぽど前に、らくに出られましたでせうものを。

この時私はイエスキリスト様のお言葉を憶ひ出しました。それは『我は門なり』といふので、聖書の聖ヨハネ傳の第十章の第九節にございます。

倩、それから私は、時々世間の人達がどんなにその罪の爲に、困つて居るかと云ふ事を考へました。外へ出る道を知りたいと困つたり、自分達のことで困つたり、困ることがさまざまあります。その人達は、一生懸命に働いて、長いことして居さへしたなら、自分達の困ることから、抜出られるだらうと考へるのです。そしてもがいて、やきもきして、有りつ丈のことをやつて、彼方此方と突進しますけれど外には出られないのでございます。ところが、イエス様はいつも『我は門なり』と云つていらつしやるのでございます。時々、私たちの幾人かゞ、戸を見つけます。唯一つの道は、私達が疲れ抜いて、もうこれつ限り翼が搏てないで、がつかりして低く飛ぶか又は下に落ちると、すると其處に戸を見つけるのでございます。

いろんな國の人達が、罪を逃れるのは、たゞ難行苦行ばかりと思つて、小刀で自分の身を傷けたり、背中に鐵輪を背負つて、竿からぶら下つたり、膝で歩いて長い道中の巡禮をしたりいたします。

この人達は、あの壁に身をうちつけてゐた。可愛相な疲びれた小鳥のやうなものです。少し控へ目にして、少し下に來さへしたなら、開いた戸はすぐ目の前にあるのでございます。そして、それがイエスキリスト様なのでございます。それは私達みんなにとつて、雑作ない、おめぐみのある道です。たゞ私達が自身をキリスト様にあげる丈なのでございますキリスト様は、私達の罪をおこゝろにかけて下さり私達の絶望をお心にかけて下さり、又私共を御心に留めて下さいます。

イエス様は仰しやいました。

『我は門なり』

（以上　松　栄子）

海の音

湯浅芽生

つい近頃のことで御座います。私共が湘南の地に遊びました時、散歩好なお父様に連れられて、私も五つになる文も、何處をあてともなく、たゞブラ〳〵と散歩を致しました。

腕組をして、いゝものを考へながら、ザク〳〵と砂に音を立て、歩いて居ましたお父様が、突然に、

『海の音。〳〵』と申しました。

ところが、傍らにチョコ〳〵跡追てゐた、文ちゃんが小さな頭を傾げてゐると思つてゐますと、

『お父様！山の音。汽車の音。』と相槌を打ちましたので、父様も微笑して、

『山の音。汽車の音。か、諾、文子よく出來た。母様！文が父様の次句を附けたぞ。』

『そうで御座いますね。』と

私は理もなく、淡い満足を覺えて、ツト點頭きました。そして彼女は私共のまわりを、小鳥のやうに、彼處此處と往來して喜んでゐました。

『文はお父様の子ですものねえ。』

私はまた斯うも、人妻の嬉しさと誇りとを表現しました。

『まさ！』

『次句はこれでどうか。今日の一日は音ばかり聞く……どうた？』

『………。ではお父様其次句は私が附けませうか。』

『ウム、云つて御覽なさい。』

『我が胸の音は君へ。如何で御座いませう。』

『そうだな、諾、出來た。サア文も作つた詩が出來たぞ。』

こんな事が、放浪のわびしい旅にあつた私共には、少からず樂しいので御座いました。

海の音。
山の音。
汽車の音。
今日の一日は音ばかり聞く。
我が胸の音は君へ。

彼は低誦しながら、際涯ない大洋を眺め入りました。そこには滑らかな青絹に、刺繍された白薔薇やすゞらんの花のやうな、なみがしらが弱い秋の日ざしに、咲きつ凋れつして、夫婦の心に相應しい、しんみりとした響をよせました。

病床の友

森田松榮子

一

人に逢ひ得ぬ
病床に
書も讀み得ぬ
病床に
友は誰ぞと
君問はば

我は答へん　この花と。

二

熱病む床の　なぐさめと
あまたの友の　きなふ今日
わが枕邊に　おくられし
君みそなはせ　さはの花。

三

野山の木の葉　黄に紅に
染めなす秋の　精凝りて
色に出でけん　菊の花
霜に傲れる　操をば
持ち來し君に　たぐへ見る。

四

病みます君よ　枕邊に
冬のおとづれ　きゝませと
しづかにかほる　水仙や
やさしき花と　葉のさまの
持ち來し君に　似たるかな。

五

みどりめでたき　初夏の
園のかざりの　紅薔薇
秋ゆく空に　咲く見れば
われはしのぶよ　色に香に
持て來し君が　ふかなさけ。

六

深山の夏を　思はする
みどり色濃き　大羊歯や
かゞやく春を　しのばする
カーネーションの　強き香や
秋病む床の　枕邊に
みどり敷きつゝ　かほりつゝ
かたりて盡きぬ　友の情。

七

たゞひたぶるに　見まもれば
うなづく花や　搖るゝ葉や
かたみにおもひ　かはしつゝ

わが病室の　あけくれの
心うれしき　友は花。

（一九一四年十一月作）

病中所感

鈴木照子

病むことを　いたづらに生くる　日なりとぞ
わびしがりにし　昨日もありぬ。

桑の葉と　風とあらそふ　さみしさを
われのみしれる　病める幸

御名をよぶ　よろこびにさへ　涙する
かよわきこゝろ　よわき肉かな。

御名をよばて　一日ありなば　絶えはてむ
いのちなれやと　祈りつゞくる。

やすらかに　ねむらせてよと　み名をよび
やすらかなりき　病みてあれども。

みづからを　こよなきものと　いつくしみ
たゞこの時の　尊くあれやと。

音もなく　ちりゆくものを　ひきとめむ
こゝろだになし　たゞいのりつゝ。

〇　小田原　寺西良造

道と云ふことを

おもひみれば尊くもあるか天地の
かみの恵みのみちしばの露

秋雨

世のなかのちりにけかれぬ芭蕉葉に
あめのおときく夜はの靜けさ

虫

なく虫をたづねていらば白露の
ひかりや消なむにはの萩原

秋江

つりやめて船を蘆まにとゞめけり
月も入江のかぜにまかせて

基督教一斑（三）

外村義郎

第三回　人間及び神に對する罪（詩篇第八篇）

人は神がわからぬといふが、神はとにかくとして一體自分とはどんなものであるかといふ事は、實はわかりさうでわからない問題ではあるまいか。

人は一體何處より來り何を爲し又何處に行くのであらうか、實にわからないのである多くの人々は是れ等の大切な問題を餘り考へぬのであります、聖書を見ますと人は神によつて造られた物としてある、即ち人は神によつて此世に來たものである然らば人は如何にして生活するのが正當であらうか。といふ迄も無く、神の御心に隨うて生活するが本當である神は人に自由の意志を與へて置き玉ふ故に、これを正しく用ひて神の御心に叶ふやうに生活してゆくのが正しい生活である然して此世の終りに於ては希望と共に神の國に歸るが本當である。

かく考へてみると、人は實に尊いかつ責任の重いものである。この事がよくわかると自ら自重する心が起つてきて、正しい生活を送らずにはゐられないやうになる。然るに多くの人は大抵高尚な生活をせず、汚れたるいやしひ生活をしてゐる、即ち罪の生活を致して居るのである所が誰でも自分に罪があるといはれると、あまりよい感じはしないものであるが、併し罪といふ觀念は最も大切なもので、それは罪の事がわからねば神の恩みと救とを悟る事ができないからである。それならば罪とはどんなものであるかと申ますに、決して法律を犯す事のみが罪ではない言ふべからざることを言ひ行ふまじき事を行ふと人々の感情を害したり苦痛を與へたりするのは罪である尙其上に、こゝに神に對する罪といふもの

がある。即ち人は神の御心によりて生れ、生くるに必要なる物を與へられて生活して居る、して見れば神を尊み愛し從ひ拜して生活するのが當然であらう。然るに多くの人は之れに反した生活をして居るのである神ならぬものを拜して、神の御心を傷めてゐる、これ即ち神の恩みを無視し神を蔑ろにしてゐるので、神に對する大なる罪である。然してこの罪とその結果ほど恐ろしいものはない、この罪によつて人は永遠の滅びに入るのである。一般に人が非常な罪と思ふ所の盜、殺人等は、神に對する罪に較べれば枝葉の罪であつてつまり神に對して罪を犯せばこそかういふ樣な罪をも犯すやうになるのである。神を識らぬ時には、此くの如き神に對する大なる罪を感ぜずして平氣でくらして居るのであるが一度この罪を悟るともはや苦しくてたまらない、如何にしたらこの罪から救はれる事ができやうかと、叫ばずにはゐられなくなる。こゝに至つてはじめて眞實の求道心が起るのである人間らしいほんとの考へが出てくるのであります。

第四回　基督、罪の救、及び十字架の意義（哥林多前書一章十七節以下）

罪の廣く深くかつその關係の廣大なことその結果の恐しきことゝを考へる時にも、どうかしてこの罪から救はれたい、如何にしたら救はれる事ができやうかといふ衷心からの要求が出でくる。それと同時にどうしても自分の力ではこの罪の始末はできない。どうしたならば救はれる事ができやうか、聖書では神はその獨子エスキリストにより、我々人類の罪を救ひ玉ふと記してある。基督御承知の通り在世の當時に於ては到る所に敎をのべ、又親切と同情とに充ちたる働をなし給ひしのみならず、遂に十字架上に尊き血をさへ流し給うたのであるが何故に基督は如此死を遂げ給ふたのであらうか。殊には彼は自らすゝんで十字架につき給ふたのであつて、決して

仕方なしにつけられたのではない。これは實に何がためであらうか。正しく人を罪より救はんがためである。神の無限の同情と愛とが此うちに充ち溢れてゐる。吾儕はこの十字架を信ずることによつて罪より救はれ恩みの生活に入ることが出來るのである。

かういひますと、それは有難い事ではあるが、あまりに有難すぎて信ぜられないといふ人がある。然らば試みに天地萬有は何によつて保たれて居るか之れを考へて見ると、すべては犧牲によつて保たれて居ると云ふことが分るその犧牲の中で最も高尚なものは、主エスの十字架の犧牲である神の獨子が罪人のために犧牲になる實に犧牲の最も尊きものが具體的に歷史上に顯れたものであつて、夫れが、キリストの十字架である、實にその因つて來る所は極めて深いものである。而してそれは二千年の昔より、信ずる者の心より心に波及して、今は全世界に此十字架の犧牲が不思議な働をして信ずるものを救ふて實に之れは大いなる神の能力である。

彙報

○東京基督敎女子青年會

▲クリスマス　廿二日午後六時より納戸町第一寄宿舍に於て兩寄宿舍合併の祝會を開く。

▲翌廿三日　寄宿舍附屬日曜學校及び青年會附屬日曜學校は各々祝會を催す。

▲廿四日には午後二時より田町なる女子青年會本部に於て本會々員並に聖書組諸姉打集ひ祝會を催す。

▲又同日午前十時より本會附屬好友園にては終業式を兼ね父兄を招待して樂しき祝會を開く。

▲廿五日には好友園日曜學校、廿六日は三井慈善病院等にて祝會を開く。

▲新入會員　其後の分左の如し。

ミス、アズグード　ミセス、マケンヂー
ミセス、スネイヅ　ミセス、テネー
ミス、ウイルス　ミス、ブラックモアー
ミス、アレン　ミス、スタブレス
ミス、ベッセクレイグ　ミス、エム、クレイグ
上野よし子

○宮城女學校青年會

日に増しお寒くなつて參りますが本部の姉樣方にはます〱御壯健で御働きの御事とよろこばしう存じ上げます。御蔭樣で當校女子青年會も一生懸命働いて居りますから御喜び下さいませ。殊に過日行はれました萬國女子青年會祈禱週の會は最も熱心に而して盛んで御座いました。八日の日曜日は夜分にも拘らず通學の方々もお見へになり時をおかぬ熱心な祈りは誠に嬉しう御座いましたそれから毎日特にお晝御飯後の三十分を戴きまして講堂に於て開かれました。先生方をはじめ青年會の會員はこぞつて熱心な祈禱を捧げ、未だ見ぬ國の未だ見ぬ多くの兄弟姉妹のために特に祈る時を與へられたその喜びを感謝致さずにはをられませんでした。自分が祈つて置き乍何だかうれしくてたまらないので御座います。私共、いと小さい弱い子供等の祈りも熱心になつて祈りました事は神樣は必ず聞いて下さると思ひました時は胸がわく〱する程で御座いました。つまらない私共にも多くの世界中の國々のために祈らせて下さるといふ大いなる特權を感謝致さずには居られませんでした。祈禱週の一週間はこの樣に盛んで力の入つたもので御座いました。又私共女子青年會では病院に入院して居る多くの御氣の毒な病人のために殊に施療患者などの不憫な方々のため幾分かの慰めとなり、又その事によつて私共の父上樣を御認めになる事も出來るだろふと云ふ事から日を定めて花を持參し差し上げることに致しました。それ故この頃水仙、フリヂヤ、チユーリップ、ビヤシンスその外綺麗な花を學校の花壇に私共がよく土を耕して一生懸命になつて植えました、來春になつてやがてこの花の咲く時は多くの憐れな病める人々の慰めとなることが出來ると思ふと嬉しう御座います。いと小さき愛の業もやがては多くの人々に神樣をお知らせする事が出來るといふことを考へて喜んでをります。

消息

○受洗者　十二月十三日東京富士見町教會に於て左の諸姉受洗されたり。三宅とも子、內田すみ子、豐子縫子（女子青年會第一寄宿舍）山本まち子（女子青年會第二寄宿舍）寺田初代子、高野重代子、佐久間マキエ子（女子英學塾）青吉とみ子（堀越裁縫女學校）。クリスマス當日に東京聖愛教會に於て河野幸子、本多眞海（女子英學塾）の兩姉受洗さる。

○按手式　小田原なる渡邊藤野子及鵠沼に保養中なる堀切きみ子は東京聖アンデレ教會にて按手の禮を受けられたり。

○大西絹子　御病氣御快方に一目下相州片瀨西濱館附近にて靜養中なり。

○河合代子　今回文部省中等教員檢定試驗にて裁縫科手藝科に合格ありたり。

○祐源とき子　文部省中等教員檢定試驗にて家事科合格。

○辻村靖子先生御母公　十二月一日御逝去なされ小田原にて埋葬式御執行ありたり。

○三井病院　同院看護婦中七名十二月二十六日受洗。

○河井道子　一月中大阪婦人大會及び三重縣下に於ける協同傳道に參加の豫定。

○ミス、マシユウ　歸米中の同幹事は一月中御歸京の豫定。

○花の日　凱旋を祝するため十二月十八日を花の日となし各有志婦人達の盡力により同日に於ける花の總賣高一萬一千餘圓に達しその中九千餘圓の純利益を得たりと

讀者便り

○神の御手に護られて安らけく

紐育市幹事養成所にて　加藤高子

私は今學課に就て申上げますと經濟入門は趣味の少ないのと六ケしいのです。つまり練習に時間がかゝつて思ふ様に準備が出來ない上に教室でもなか／＼骨折りてした。私は日本の狀態から考へて是非／＼下地として學ぶべき必要があると存じましたが時間が大變にかゝります。英文學はテニソンのアイドウルスオブキングから始めました。私と支那人の二人とです。私は支那さんにまけるかもしれませんが何卒許して下さいませ。名譽をわすれて一生懸命に致します。久々で文學をしますので嬉しう御座います。私は何とかして實業界に於ける婦人の様子を歸朝迄に調べたいと存じてをります。一昨日から三井物產の御役人の一色と申さるゝ方の奥様が此所に私共と一緒に二三週間御住居の事になりました。まだ若か相です。女子大學の女學部卒業で此所に住居せられて四ケ年半、今度東京詰で御歸國になる筈の處戰爭の工合で御豫定が變り一月頃御歸國とか。今御主人が旅行中故其の間耳をならすため傍聽生として組にも御出になります。此の幹事養成所では部屋が一つ／＼てすので自分の城と考へて沈默の時に用ふる様にして居ります。

十月三十一日の晚に東洋大學生を招いて家庭會をしましたの、實によい行き届いた準備が出來て樂ませて下さいました。女だけてすの、岩澤さん、原田さん、中村さんとか云ふ人達も御出になつて、岩澤さんと原田さんはすむと直ぐおかへりになりました。二三人の支那人はまだ泊つて居ります。明朝まで居ります。三人程の支那婦人と一人の

印度人が居ります。ほんとに澤山を招いで下さいましたが皆大喜びでした。面白い妖怪の話がありました。芝居も一つありました。なかなか元氣でした。翌朝は一緒に教會に行きました。原田琴子さんは實に元氣で同姉には天下に恐ろしいもの一つもなしと存じます。「コプトリ」の話をなさいましたよ。西野さんは勉强だからして來ませんの。其次の土曜日の晩にはミス、ダッチの處に夕御飯に參りますの。二三人で招かれました。次には交るがはる招かれますとか。此所まで書きましたらたまらなく眠むくて横になりましたら六時十五分前まで寢込みました。それで大急ぎて仕度をして夕飯にと參りましたら谷岡貞子さんを御存じの方が私の組の方の御友達ですのでお目にかゝりました。食後は火の前に皆が集まつてミス、ドーが話を二つおよみ下さいましたのをきいて居りました。それから十程讃美歌を唱つて今下りて來ましたの。今日の日も暮れて又神の御手に護られて安らけくやすみます。

○この様な事のありましたのは始てです

神奈川　井戸本小夏

私は先週の日曜日にいつもの如く田舍の日曜學校に行きました其時の苦痛であつた事を少し書きまして御知らせ致します。其時はいつもいたす所の家の主人が留守でしたので塲所がなく終に道のそばの生徒の家で致しました。所が其日にはいつも參つたことのない男の子供が四五人來ました。私は片方眼が見えませんので子供は色々私にかまいました。そして色々の物を私にぶつつけましたので若しも日曜學校の子供にあたつては困ると思ひましたので、私は男の子供のそばに行きました。すると又色々の事を云ひました。今度は私のそばにきて玉を入れてそれを投げますとひどい音がします物を足元に投げました。けれども私は平氣で見て居りました。又其所は道の傍ですから人が多く通りますので來る人は皆車を止めて見て居ります。又行つたと思ふと後からきた人が又止まつて見て居ります。斯く子供は私を一番かまいました。私は多く人が見て居る中に眞實に辱しめを受けました。けれども私は少しも失望をいたしません、この目で滿足して居ります。私があまり信仰が薄いので試みに逢つたと思ひまして神樣に感謝いたしました。其の時私が直ぐ思ひ出した事は讃美歌の二百三十三番「この世を主に捧げまつり、神の國となすためには、せめもはじも死も亡びも何かはあらん主にまかせて」と云ふのを思ひ出しました。それでせめられても、辱しめられても正しき事のためには働かうと思ひました。この様な事のありましたのは始めてで御座いますけれ共若し私が神樣を知りませんでしたならば失望してしまうてこれから望を以て事をする事が出來ませんでしたかも知れませんが、眞實にキリスト樣の敎へは活ける敎と思ひます。今晩から日曜の夜丈青年會が責任を持つ事になり信者と未信者と別れて組會と云ふ名をつけ會長始め委員方が指揮して下さいます。

○一日でもいゝから行つて話してやりたい

仙臺　横澤つぎ

只今私は「ステッピングヘブンウオード」と申す本を讀んで居りますが如何にも好く信仰の道すぢが表はされて居ます。私は丁度あの始めに於けるケートの如くです。あとに於てあれ丈の信仰のものに成ればよろしいのですが仲々かたい事です。讃美歌の二百五十四番は好きな歌になりました。著者の人格を思ひますからでせう。深い意味の歌で御座います。以前私の敎へて居た學校で過日生徒の讀でゐる雜誌を一

切しらべられたのです。すると一人の生徒は「女子青年界」と書いて出しました處が先生は聞きなれぬ名なので本人にその本を持つて來させ御覽になりし由、處が同校に一人人格の高い先生がありまして其の雜誌を見て實に高尙な立派なものであると先生方のところにて賞められしよし實に正義の前には敵はありませんのです。私はこの事を聞いて難有くてなりません。其の生徒もよろこんでよこしました。私の聖書の組に一番よく來又一番よく雜誌を取つてくれた子供達は今四年で來年は出るので御座いますが多分引續き購讀する事と信じて居ます。色々の事を考へると一日でもいゝから行つて話してやり度くなります。何故かくは彼地に引かされるのでせう。私は意志の弱いと申す點からでせうか。又私は居た處は何處でも一緒に居た人は誰とでも親しくなりますがこれも一つの缺點の樣に思ひます。近頃私が考へて居ますことは神自身に走り行けといふ事でありますが古い事ながら繰返す毎に新しい意味をあたへてくれます。神に達するの道は三步行き一步退くと申しますが自分は二步時によると三步も退きます。身も心も魂も神に捧げんには神は私共に拒絶なさるものは多くあるとの事凡ての失敗も若も全力さへ盡して居るならば私は悲しみませんが、唯精神上の進步の鈍きは悲まざるを得ません。もし私共が御許しさへあれば神は兩手をひろげて私共を抱きかゝへて下さるとか實に勿體ない事です。此度は私が敎保に立つてゐる櫛田樣が敎保に御成りとの事私は羞づかしい樣な恐ろしい樣な嬉しい樣な氣がしました。私は櫛田樣のため私のために敎保に成つて下さいと申しました。櫛田樣のためによいは勿論の事私に非常に力をあたへ、かつ責任を感ぜしめました昨年の三月三十日に始めて同姉の敎保に成り今又この事あるは神の御惠でせう。その日は私も近き仙臺から覺えて居るつもりです。

○同じ祖母とは思はれません

東京　大川きよ

昨日水戸の祖母から手紙が參りまして先日植村先生に御目にかゝつたと申して喜んで參りました。それに又近々洗禮を受け度いと思ふて居ると申して參りました。手紙なども本當に優しく私も始めてあの樣な優しい手紙を貰ひました。本當に嬉しく存じて居ります。どうか祖母の爲又御祈り下さいませ。此の祖母が數年前に私の聖書、讃美歌を焚き捨て、私を邪敎者として譴責した同じ祖母とは思はれません實に神の御惠と御能力とを賛賞する外はありません。

○自分で自分の心に尋て反省して居ます

大津　馬屋原妙子

近頃敎員生活の淺薄な事がつく／＼身にしみました。誠に自己が人を敎へ導くものなる事を自覺して職務の神聖なる事を信じて居る人が幾人ございませう。多くはパンの爲、職員室殊に女敎員の席は誰がどうした彼れがこうしたと云ふくしや／＼した話ばかりであき時間を費して居ります。上席の職員は互に權勢を爭つて居りま　。私がクリスチヤンと云ふ立場から考へれば了解する事の出來ない程ごた／＼こみ入つた生活でございます。然し神樣が私をこんな境遇にお置き下さいました事を感謝します。「汝等は世の光地の鹽なり」との御言葉をしみ／＼感じます。世の光地の鹽となるに適當したいと存じます。學校では私の事を宗敎家とか修養家とか眞面目で云ふて居る人も嘲り半分で申して居る人も御座います。學生時代と只今と時々比べて見ますが私は社會の惡例をあぐれば人の缺點のみ目につく人に幾分なりはしなか

つたでせうか。自分も只パンの爲に教員をして居るのでせうかなど思ひ唯自分の心にたづねて反省して居ります。「自ら立てりと思ふ者は倒れざる樣すべし」と云ふ聖句を思ひ「恐れおのゝきて己が救を全うし」たいと存じます。

○一人前働けます事神の惠に御座候

別府　高島政乃（舊高木）

昨年四月末廣島縣立病院を退院してより五月上旬伺別府より三里隔りたる日出町と申す所の學校に勤め居り候へども病後兎角無理を生じたると相見え六月末頃より又も惡しく相成り食事はおも湯と玉子の黃味のみを取り居り候次第なれば常ならば缺勤致すところなれ共學期末の事とて無理に元氣を作りて出勤仕り候間いよ／＼身體損ひ休暇になるや否やに當地の溫泉にて靜養致し居り候へども其の間に起る私の苦痛は當校長は至つて健康の方にて殆ど病氣に侵されし事なきまでにて至つて短氣且同情の念には少々薄く其の上自己の權利を以て人を支配すると云ふ人に御座候。弱體を以て事情のわからぬ土地殊に校長の取り計ひとに到底つゞかず十一月に辭職いたし候。併せて入り込みたる家庭の事情とにて私と妹とは暫時戶主の兄より勘當と云ふ事と相成り申候。常ならば何處になりと又如何なる職業を取るとも差支へなきも身體弱りて辭職すると云ふ場合に如何とも致しかたく、當時は手紙を書く間机にすがりてさへ腦に故障を生ずる場合眞に依るべきは只神樣のみ。而して眞の喜びは自身のものにあらず此の世のものにあらず。主キリストの外何者もなしと云ふ觀念否信念が明り／＼と見え、祈りを以て神の御指導と、御攝理を仰ぎ居り候幸には當地は入湯地に御座候まゝ有名の牧師樣方の御話も度々伺ふ事を得、殊に私の信仰を高めて頂きしは同宿に京都市の同胞教會の牧師樣が同じ病氣の爲に二月の末まで滯在せられ毎夜聖書の御講義をして頂き、而して伺旅館は有名なる禁酒旅館（ほなみ屋）に御座候へば大抵の客は信者の方にてお正月前後は殊更賑かに御座候。昨年は今迄起りし吳市高等女學校時代や島根に勤め居りし時の迫害の如き單純のものにあらず隨分苦しみ申候然しながら又昨年末ほど喜びを以て年の暮を送りて感謝と希望とをもつて年を迎へし事も生れてはじめてに御座候。御正月前後は同宿の十二三名の信者と又教會側の兄弟姉妹がたと誠に／＼愉快な日を送り申候實に信者の交りの聖くして樂しき事又他に比類なき事を泌々感じ申候斯くして實兄の心も漸くして解け本年正月一日より又以前の如き親しき仲と相成り候。一時は生活上にも大いに困り又薄信なる我身にとりては死なん計りに苦しみ居り候ひしも愈々自分に意志を定め御旨にのみ任せ來りし時には神は計り知るべからざる御攝理を以て愛し給ふことを實驗致し申候。我等の肉體に於ても精神に於ても、神は私の信仰を試して下さるために斯く苦痛の中に置き給ひし事、而して何者にも優る眞の喜びを私に與へ給ひて、殊に肉體にも精神上にも不足なき此の保養地に於て私を永く靜養させて被下候ひし事實に／＼感謝の外無之候。身體も一月より四月頃までは月の半ば氣分勝れざりしも、五月頃よりは餘程快く相成り八　頃には殆ど快くなり申候。しかし少しの用事をするにも恐ろしく御飯も輕く二杯位ひより頂き申さず候へ共十月結婚いたし候以來益々丈夫にて此節は平時が三杯で氣のむきし時は四杯も五杯も頂き何を致すも苦にならず大丈夫一人前働けます事全く神の御惠みに御座候。

○何か御用を致度申出候

青山　及川なほ子

先日河井先生より色々會の事業を承り一同喜び勇み立ち候。爰に本校高等部の數名是非とも青年會のため別して氣の毒なる姉妹を助ん道に於て何か御用立をいたし度申出候試驗後廿七日より卅一日まで辨當持參にて參る積りに候　何卒御使ひ被下度願申上候。

〇會友會費領收（本部報告）

金壹圓　渡邊すみ　高橋直子　村松環子
　　　　河井道子

〇雜〇『女子青年界』代金〇〇

金七拾錢

馬詰きやう（自大正三年四月至同四年三月）　黒田始子（自大正三年四月至同四年三月）

工藤まき（自大正三年十月至同四年九月）　岡村愛子（自大正三年十一月至同四年十二月）

太田きく（自大正三年十月至同四年九月）　小田切儀（自大正三年十月至同四年九月）

中原ます（自大正三年十月至同四年九月）　岡田てる（自大正三年十月至同四年九月）

清水まつゑ（自大正三年十月至同四年九月）　藤本武子（自大正三年十月至同四年九月）

三好待子（自大正四年一月至同四年十二月）　上野よし（自大正二年十一月至同三年十月）

安東庸子（自大正三年十一月至同四年十月）　佐藤さい（自大正三年九月至同四年八月）

加藤よしみ（自大正三年十二月至同四年十一月）　横山きよ（　）

金壹圓四拾錢

ミスケギー（自大正三年十月至同四年九月二部代）　平山安代（自大正三年四月至同五年三月）

女子英學塾青年會（自大正三年一月至同四年十二月）

金參拾五錢

松[illegible]止未（自大正三年八月至同年十二月）　松尾きく（自大正三年八月至同年十二月）

金七拾五錢　松崎定子　自大正三年十一月至同四年十月）

金四拾貳錢　鈴木くに（自大正三年十月至同四年三月）

金貳拾壹錢　眞山辰代（自大正三年十月至同年十二月）

金六拾參錢　小野塚孝子（自大正三年四月至同年十二月）

金壹圓貳拾壹錢　橋本きみ子（自大正三年十月至同四年九月）

金八拾參錢　服部たい（自大正二年八月至同[illegible]年十二月）

金五拾六錢　川澄すま（自大正三年四月至同十一月）

金壹圓拾貳錢　中村玉子（大正三年十一月號十五部代）

金拾四錢　成田ひさ（大正三年十一月及十二月號代）

電話番町四五六三

東京市牛込區田町三ノ十二
日本基督教女子青年會本部

振替東京貳參七貳參

日本基督教女子青年會支部及寄宿舍其他位置

名稱	位置
東京基督教女子青年會	東京市麹町區三番町四一
廣島女學校青年會	廣島市上流川町
同志社女學校青年會	京都市上京區今出川通
プール女學校青年會	大阪市西區川口町一二
ウヰルミナ女學校青年會	大阪市東區玉造
札幌女子青年會	札幌區北四條北星女學校內
宮城女學校青年會	仙臺市東三番町
クリスチアン女學校青年會	宇都宮市二條町七二
フエリス女學校青年會	橫濱市山手町一七八
共立女學校青年會	橫濱市山手町二一二
女子英學塾青年會	東京市麹町區五番町一六
女子學院青年會	東京市麹町區上二番町三三
青山女學院青年會	東京市青山南町七ノ一
女子傳道學校青年會	東京市小石川區指ケ谷町八四
神戸女學院青年會	神戸市山本通四丁目
金城女學校青年會	名古屋市東區白壁町四丁目
盛岡女子青年會	盛岡市內丸タピング方
德島女子青年會	德島市富田浦仲町ミスリッン方
橫濱女子青年會	橫濱市本町五一
搜眞女學校青年會	神奈川一本松
第一寄宿舍	東京市牛込區納戸町四五
第二寄宿舍	東京市小石川區水道町(安藤坂)
幼稚園	東京市小石川區金富町五二
旅行者の友事務所	東京市本鄉湯島

National Committee

Headquarters. 12Tamachi Sanchome, Ushigome,Tokyo

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inouye, Treasure
Miss Michi Kawai,
Active Member World's Committee

Resident Members	Non-Resident Members
Miss Ume Tsuda	Madame Asa Hirooka, Osaka
Miss A. B. West	Mrs. Koito Saiki, Kyoto
Miss Uta Suzuki	Miss M. F. Denton, Kyoto
Miss Kita Hasegawa	Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Sarah Ellis	Miss Yoshi Kajiro, Okayama
Miss Chiyo Yamada	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. E. W. Clement	Miss Susan Searle, Kobe

Secretaries

Miss Michi Kawai, National
Miss A. C. Macdonald, National,
Miss Ruth Ragan, National Office
Miss Margaret Matthew, on Furlough
Miss G. R. Watney, Acting General, Tokyo
Miss Mary Page, Acting Associate, Tokyo
Miss M. Baker General, Yokohama

本誌定價

一部(郵共) 金七錢	一ケ年分 金七拾錢
海外 金拾壹錢	金壹圓廿四錢

廣告料

一頁 金六圓	半頁 金三圓五十錢
四分ノ一 金貳圓	一行 金貳拾錢

大正三年十二月廿八日印刷納本
大正四年一月一日發行

發行所　東京市牛込區田町三丁目十二番地　日本基督教女子青年會
編輯兼發行人　東京市牛込區田町三丁目十二番地　河井道子
印刷人　東京市芝區櫻田和泉町七番地　鈴木次吉郎
印刷所　東京市芝區櫻田和泉町七番地　三成舍

■アリス・コークラン女史著。■林　靜太先生譯

母として、妻として、娘として、姉妹として、男子に及ぼす總ゆる婦人の感化と援助とを、古今實在の賢婦名媛の事蹟に徵して記述せるもの即本書也。

婦人の典型

（定價壹圓■郵税八錢）

■聖アウガスチンの母モニカ
■ラヂウムの發見者キユリー夫人
■グラッドストーンの妻
■「理想鄕」の著者とマーガレット・ローパー
■ビコンスフヰルド伯爵夫人
■大天文學者の妹カロリン・ハーシエル
■ミルの「エゼリア」
■詩人ウオーヅオス兄妹
■「救世軍の母」ブース夫人
■ルナンの姉ユゲニ・ド・ゲリン

其說くところ穩健にして摯實、引例は豐富にして該博也。即ち是れ健全圓滿なる理想を供し、淸新高雅なる趣味を與ふる「婦人の自動論」と謂ふべく、而かも裏面凜乎たる宗敎的信念は、隱約の間に認められずんばあらず。されば本書に依りて世の婦人は、神聖なる天職と眞正なる使命とを自覺し、精神的向上の一路に多大の光明と指導とを與へらるべく、男子も亦是に由りて、眼界頓に開かるべし、殊に社會硏究家、文明批評家、敎育家に對しては、必須材料を供給するものなり。

■女子大學校長成瀨仁藏先生序。（肖像寫眞十葉挿入）

四六判四百頁　洋布製美裝

■發兌　東京京橋尾張町　警醒社書店　振替東京五五三番■

女子青年界第拾貳卷第一號
大正三年十二月廿八日印刷納本大正四年一月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可